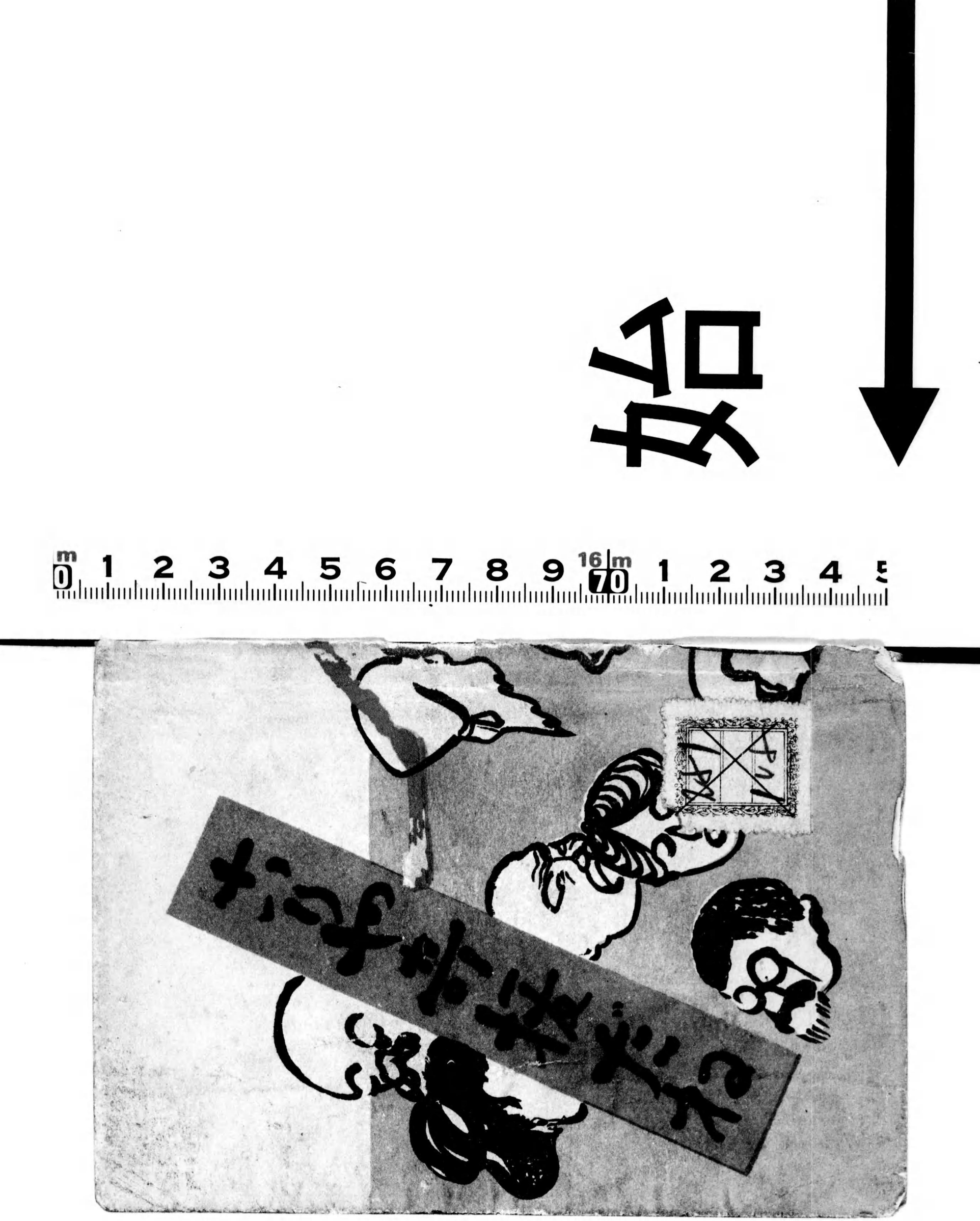
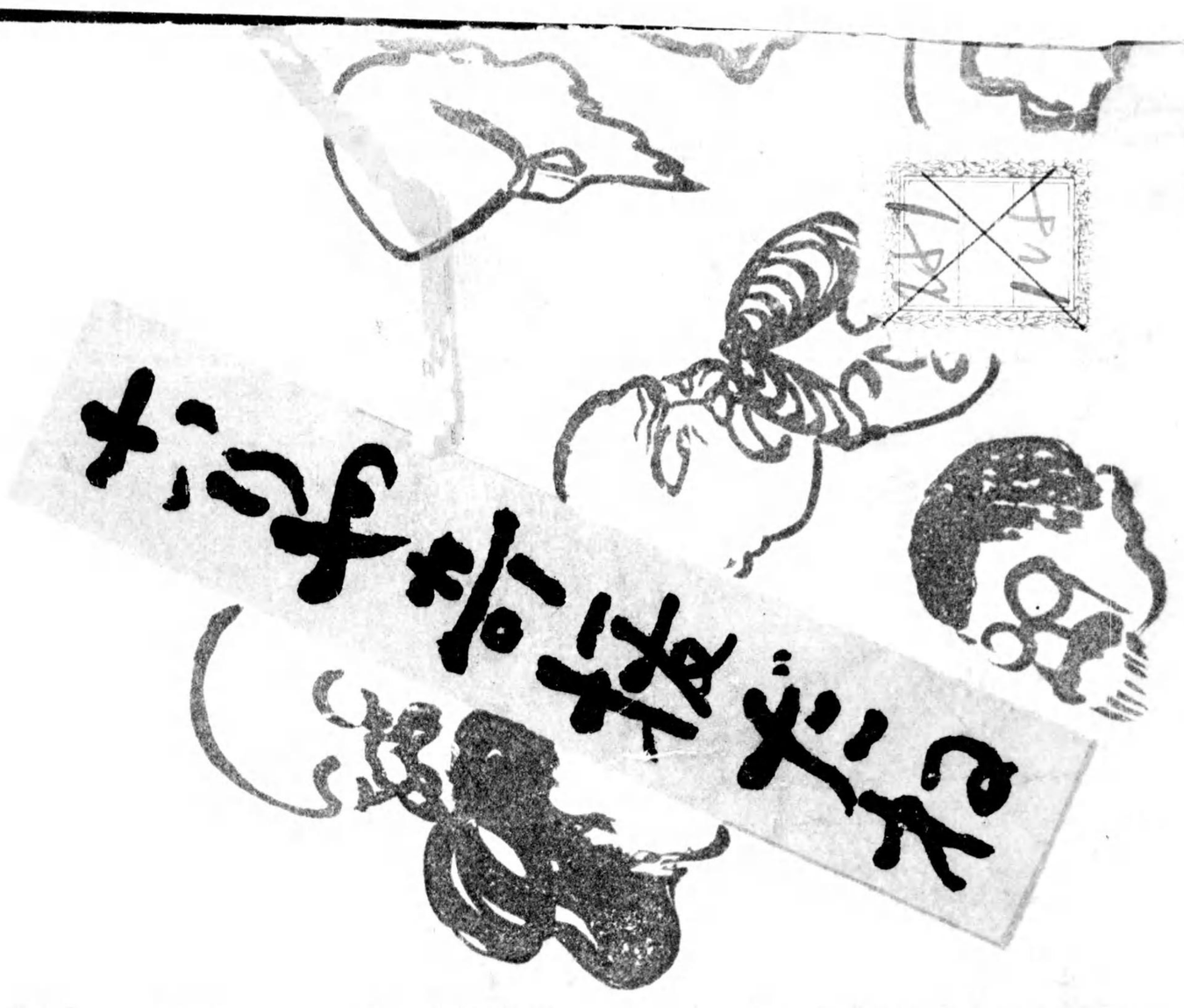
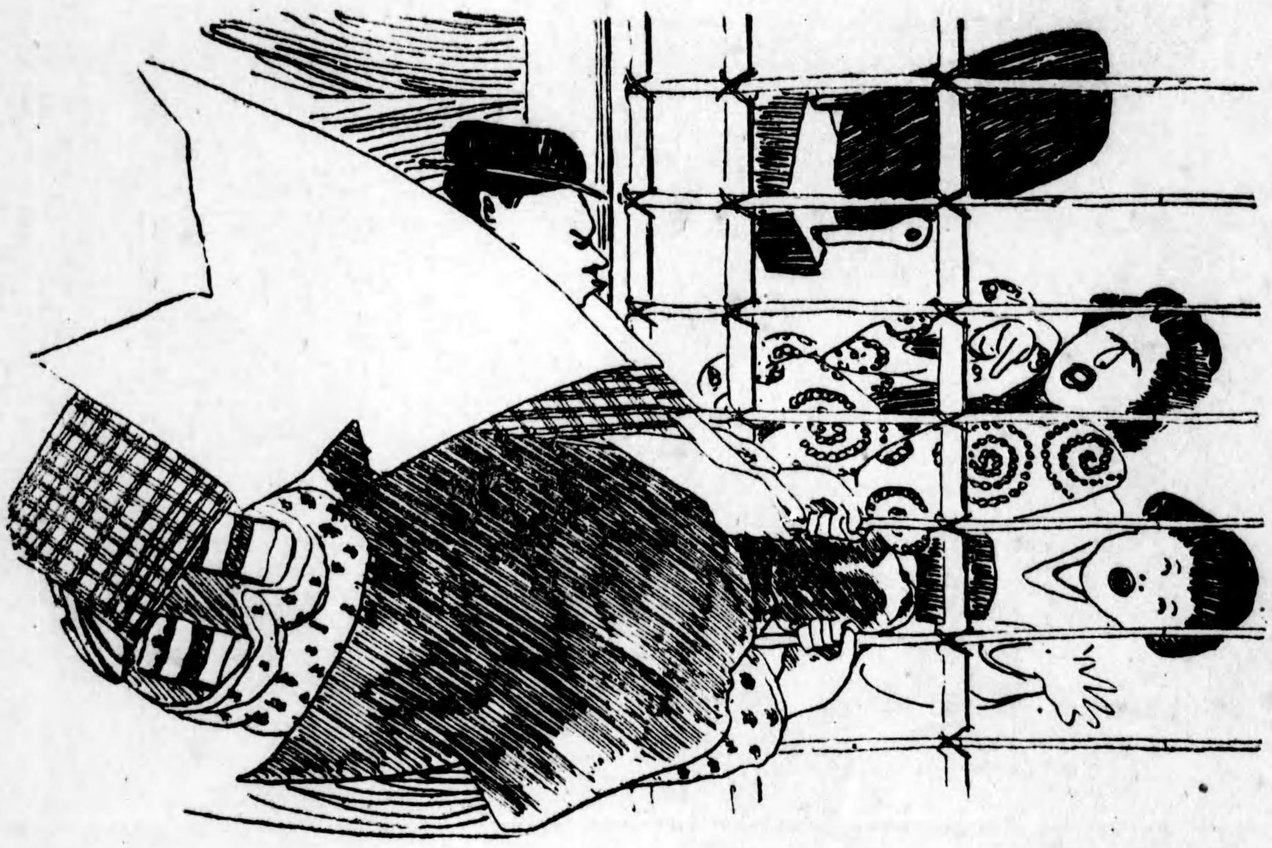


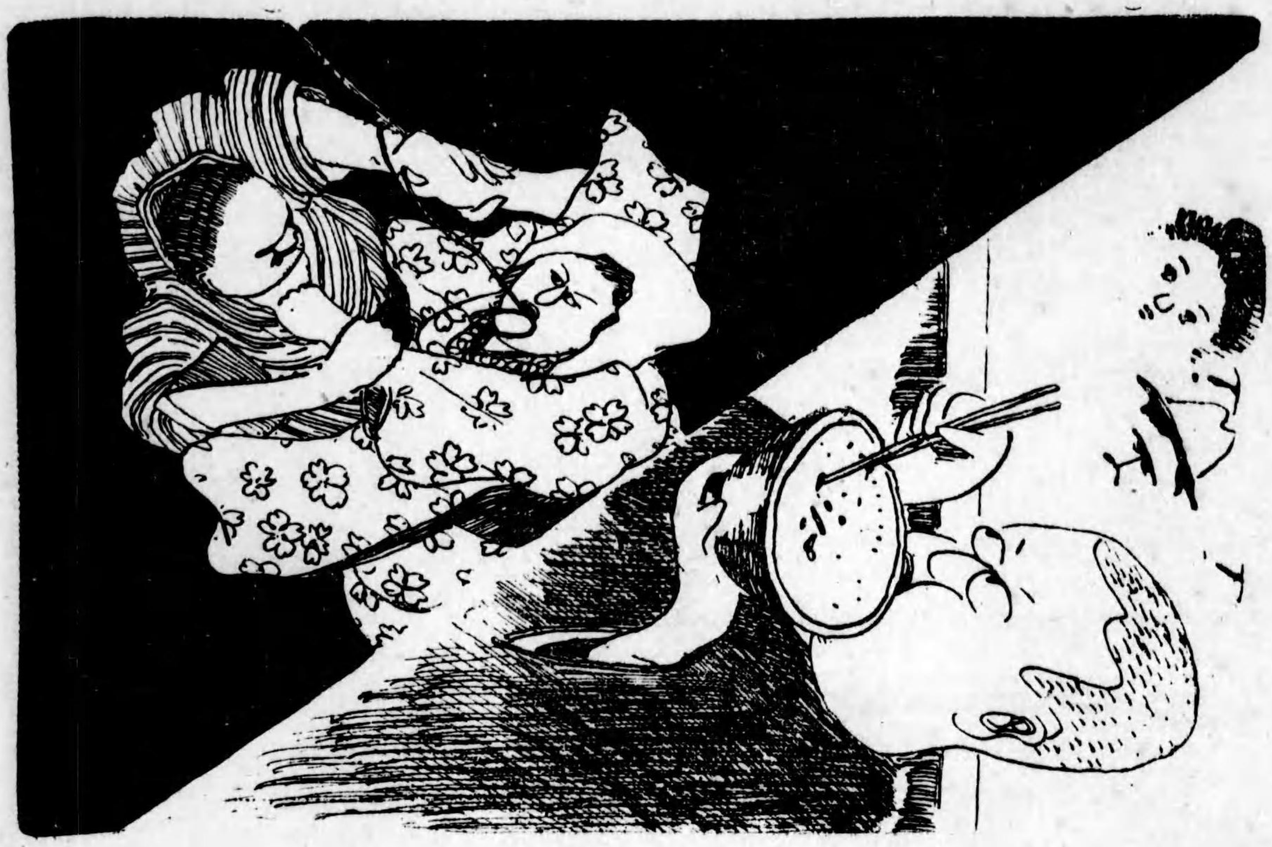


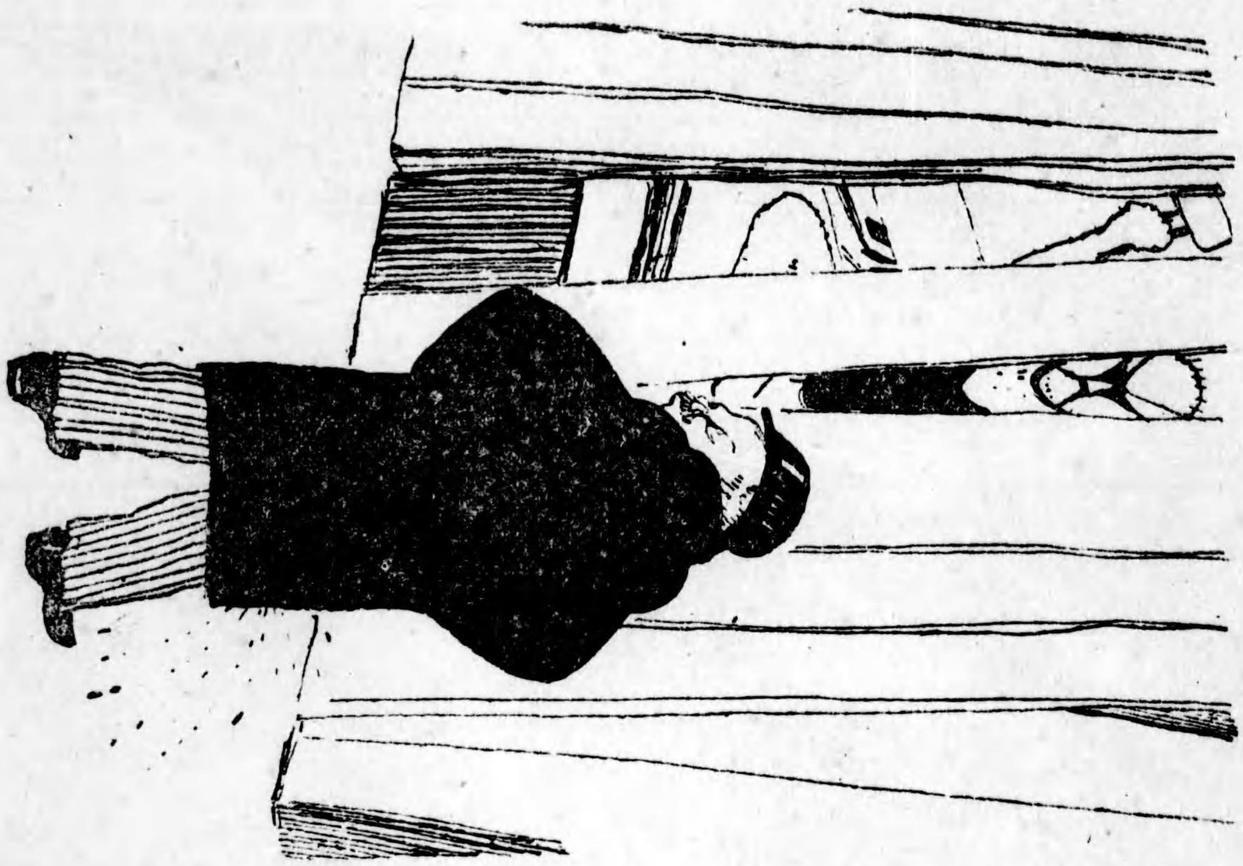
こりや奇拔だね

ずぶ六著

大正
8. 4. 16
内交







特101
105

自序

『こりや奇拔だれ。』と言ふ言はゞは讀者の勝手、少なくも自分丈は『こりや奇拔だれ。』と思つて書いた積也。

出るから入るから、寫眞機の鏡玉に睨められる所謂天下の名士の噂の種、さては著者が親しく見聞きした嘘の種を撰擇して、『こりや奇拔だれ。』と獨よがりか此書也。

大正八……三……一、　すゞ　六

目次

◎新古毘合戰……一
◎緊急狀態……一三
◎電柱の瘤……一五
◎犬意張の裸ン坊……一七
◎乘過ぎ酒……二一
◎底拔籠……四二
◎擧丸鍋……三一
◎開いた口に羊羹……四〇
◎春花春情……五一
◎汽車に酒料……五二

◎古服に新服……五五
◎草餅違ひ……五六
◎飛んだ的違ひ……六九
◎まるで落語……九二
◎糞尻の交り……七三
◎新式機關車……八三
◎將軍樣の親子丼……八五
◎鼻抓み……八七
◎これでも日本語……九一
◎珍强盜……九三
◎樣喜び……九四
◎臭い驟雨……一〇二

◎泥棒話……一〇六
◎桝呑將軍……一一五
◎恨みの猿股……一一〇
◎男の奥さん……一二五
◎それは逆樣……一二八
◎白紙が價値……一三〇
◎飛んだ腐泥……一三二
◎黑枠の結婚披露狀……一三六
◎帽子强盜……一三八
◎發狂太夫……一四〇
◎殿、閣下……一四二
◎龜ノ子踊り……一四四

◎物騒な番號……一五〇
◎後藤男の戒名……一五二
◎一軒燒……一五四
◎何方が主人？……一五五
◎婚禮に御出棺……一五六
◎八犬傳の一人……一七〇
◎泥醉漢が記錄……一七二
◎捕物鉢合せ……一七四
◎擂合みの傳染……一八〇
◎閑暇があつたら强勉せい……二〇〇
◎頓智の名答……二〇一
◎電燈反對……二〇五

◎泥棒に佛國式……二〇七
◎五九郎が氣苦勞……二〇八
◎高橋博士の隱藝……二一七
◎横取聟……二一八
◎寄附飛行……二四六
◎茶目の徹底……二四七
◎ドンブリッコ博士……二四八
◎足の改良……二四九
◎茶目修行物語……二五一
◎冥途へ香奠……二六九
◎遲相のわかい……二七〇

◎物騷な酒宴……二七七
◎將來の敵國……二七八
◎按摩から肱鐵砲……二七九
◎どうやら斯うやら……二八〇
◎越後名物『短唄』……二八二
◎變つた一癖……二八三
◎評判程でもない尖頭（ピリケン）……二八五
◎禿山菊……二八六
◎『町の娘』の櫻待振……二八七
◎御難の艶福……二八九
◎蚯蚓信者……二九〇

◎眞平氏の力彌……二九二
◎飛んだ愛讀者……二九四
◎犬猫小便すべし……二九五
◎逆さ業平……二九六
◎土屋違ひ……二九七
◎奇拔な女中募集廣告……二九九
◎乘違ひ曳違ひ……三〇一
◎便所籠城……三〇二
◎福原君の潛在精神……三〇四
◎政友會の理屈……三〇五
◎勿體なさ過ぎる……三〇六

目次

◎死人の傍でコラサノサイ……三八

こりや奇拔だね

ずぶ六著

▣新古屁合戰

河童川太郎の唾涎措く能はざる人間の尻子玉とは、果してどんなものだか見た者がない。現時ならば體内瓦斯の排泄で、殊更鼬の最後屁などは、獨逸の有毒瓦斯以上の威力を有つてゐる、併し昔しは屁なるものゝ正體を繪によつて示す時は、誰も彼も同じやうに、黄

色い玉が尻から飛出してゐるのがお定りの圖である。

『放屁と言ふものは繪に畫いたやうな丸るいものだらうか。』の疑問を解決しようとした奇抜な篤志家が、明治初年にあつたのが面白い而も其研究者たる平素試驗管と藥品の中に埋まつてゐる科學者とは似ても似つかぬ、新橋煉瓦地の名妓二人の共同研究だから、更に色氣があつて面白い。

『ちよいと姐へさん、放屁は本實にお尻から丸い玉が飛出すのかしら……？』

『どうだかね、まだ私も瞭然見た譯ぢやないから、黄色いものか青いものか丸いものか四角なものか、どつちとも言へないね。』

『ぢやあ姐へさん、二人で放屁の正體を見つこして、繪に畫いてあるのが本實か嘘かを試して見ようぢやないの……』

『成程、こりや面白い考ね、けれど色消しなお尻を捲つてブー〳〵やるのは見つともよくないからね。』

『けれど誰もゐない處で、私と姐へさんと二人限りでやる分には恥しいも色消しもないでせう。』

建言我意を得たり矣と大きく頷いた姐へさん。

『では善は急げ、放屁の正體を見破つてやらうかね。』と議熟して、早速兵糧を詰込む段となつた。

『姐へさん、薩摩芋よりは午蒡の方がよく出るさうだわよ。』なん

て……。

奏功顯著、早や下腹が張つて來て、何んだかむづ痒くなつて來る

『あらもう出さうよ。』

『まだ早いよ、さあ方々よく締めて、誰にも覗かれないやうにおし、』と用意萬端整へた上で、愈々發砲開始の幕は切つて放された

『さあ姐へさん、よく見てゐて頂戴、そらップー。』

『お臭い、おやつ丸い玉も黄色いものも何んにも出やしないよ。』と發散する人造香料を鼻を摘んでの御穿鑿。

『姐へさんが愚圖々々してゐるからよ、放屁なんか石鹸玉と違つてお尻を出るとすぐ消えて了はうものよ、だから出口をよく見てゐなくつては駄目だわ。』の説明もまだ疑問の解決には至らない。

『よくつて、もう一つ、そらプー。』

『大きな音だね、臭い〳〵、お前の放屁は可厭に臭いね、けれど肝腎の丸い玉はちつとも出て來ないよ。』

『姐へさんは屹度目が惡いのよ、今度は私が見届るわ。』と擡げた臀を下して松王もどき、

『金札か鐵札か、生き屁と死屁とは音の違ふもの、身代りの屁の玉其手は喰はぬ。』と屹と凝視めた顔の先へ、先樣お代りの姐さんが

『いゝかえ、プー。』

『あら臭い、フッ〳〵。』

『見えたかへ？』

『不思議ね、聲はすれども姿は見えぬ、ほんにお前は屁のやうだつて全くね、何んにも見えないわ、もう一つ大きいのをやつて御覽な。』

『よく見てお出でよ、そらピースー。』

『フッ〳〵、堪らなく臭いわよ、そんな楷子屁なんかやられると、蒸せ返つて了つて、氣息も何も出やしないわよ、あゝ臭い、あゝ苦しい。』

『見えたかへ。』

『餘んまり臭くつて、目を開いてゐられないわ。』

こんな鹽梅で、折角の研究も、屁の泡の騷ぎに夢中になつてゐる處へ、思ひも寄らず、障子ガラリと押開けて入つて來たのは、誰あらう當時通人の御前で名の通つた故福地櫻癡居士！

『こりや堪らない。何んて臭い眞似をしてゐるのだ？』と鼻を摘んで呆氣に取られたのも道理、奇臭紛々たる座敷の中には、花恥かしい姫御前のあられもない、百年の戀も一時に醒むべき色消しな屁合戰。

『あら、御前！』と狼狽て、緋縮緬の幕を下したがもう遲い。

『あはつはゝ、フー臭い、まあ障子を明け放つせよ。こりや近頃珍らしい見物だ、さあ斯う座敷を開放した處で、もう一合戰やつて

見ろ、檢分の役は此櫻癡がしてやる。全く好い圖だ。』と二人から事の次第を聞いた櫻癡居士は噴飯しながら言ふ。

『もう澤山、懲々したわ、ねへ御前、これ計りは誰れにも喋舌らずにゐて頂戴！』と愁訴嘆願。

『よし〳〵喋舌らないから、もう一遍やつて見たらどうだ？。』

『詰らない、繪なんかはみんな嘘の皮ね、黄色い丸い玉なんか、ちつとも出やしないわよ。』

『あはゝ。もつと氣息張ると出るかも知れない。』

罪の深い居士は、二人の愁訴嘆願に背いて、此珍研究の結果を、通人仲間に發表したから堪らない、色消な臭氣は、それからそれへと傳播つて、今更後悔の尻をつぼめても間に合はなかつたと言ふ。

色消は色消だが、此屁の研究は實行者が實行者丈臭い中にも何處となく艶つぽい處もある。これを大の男が遠慮なしにブー〳〵やられては豈それ堪つたものではない。

場處は房州、暑中休暇の海水浴に集つた一高の生徒七八人、何がさて蠻殼自慢の連中達、夕食後の退屈紛れ、腕押脛押はまだしも、立上つてドタンバタンの相撲騒ぎ、疊が切れやうが根太が歪まうがそんな事には一切無頓着。

『どうだい、何か珍工夫の遊びはないか。』と一人が言出すと。

『よし〳〵今我輩が奇拔な遊戯を案出してやる。』と何處から持ち出

して來たが、蠟燭一本、碁盤の上に點火して押つ立てる。

『何だ、蠟燭の消しこか、面白くもないそんな陳腐な事は御免だ』

『氣の早い奴だ、さう先廻りしないで我輩の案出した遊戯法をよく聞け、此蠟燭を口で消すのは陳腐千萬だが、これを屁で消すのは面白からう、向陵の健兒たるもの、須らく英氣が五體四肢に充滿してゐなければ駄目だ、雷に肺量の強いのを自慢にする奴が間違つてゐる。屁の威力が障子を吹き破る位の元氣を持つて居らんければ共に談ずるに足りぬ、其處で我輩は此蠟燭を利用して、君達の放屁力を試してやらうと言ふのだ。我と思はんものは、此處へ出て一發の許に此火を消して見ろ。』と蠟燭を座敷の中央に持出す

『こりや奇拔だ、こりや面白い。待て〳〵、僕は今餘んまり相撲を取つたので、英氣が少しく消散してゐる、もう少し腹中に瓦斯を蓄へてから消して見る。』

『弱い音を吹くな。よし〳〵先づ第一に僕が消して見る。よく拜見しろ。』と眞黑な尻を突出して第一發の毒瓦斯放射！

『臭へ、却々やり居る哩、だがまだ火は消へさうにもしないぞ。今度は俺の番だ。』と後向に狙ひ定めてプッ。

『駄目々々、少し計り動いた丈だ。よしつ我輩が見ん事消して見せる。』と代る代る汚い臀を差向けて放射の競爭。ピー、プー、スーブーの怪音凄じく、目も鼻も開けてゐられない。臭氣は濛々と座

敷中に充滿したが、肝腎の蠟燭は悖ともせず嘲けるやうに、大勢の眞黑な尻を眺めてゐる。

『意氣地なし計り揃つてゐるな。よし今度こそ僕が一發の下に消止めてやるから、大きな眼を刮いて拜んでゐろ。』と豪語一番、下腹を充分撫下げ、體氣充滿した尻を持つて來た一人。

『そらよしか。』と蠟燭の上に突出した迄はいゝが、どうした譯か。

『あつ熱つ。』と叫んで臀を振りながら飛立つた。格好は珍無類の可笑味であつた。

『あはゝ、おいどうした〳〵？』

『どうした處か、熱くつて堪らない、一寸俺の臀を見てくれ。』

あはれ、餘り功名心に焦り過ぎた結果は、蠟燭の火の爲に、尻の毛迄燃して、慘ましい火傷の痕がまざ〳〵と……。

▣緊急狀態

罪の深い惡戯、人の惡い骨頂……。

帝大教授牧野博士、醉ふと必ず立小便する癖がある。それも人通りのない暗闇なら兎も角、四邊お構ひなしに赤蛇蜿々の筒先を拂ふ而も時によつては態と交番の巡査に、これ見よがしにやらかすので職掌柄醉漢と思つても、其儘に見遁がす譯には行かない役目。

『こらつ。』と一喝、其次はお定りの說諭、處がそれにおいそれと頭

を下げて引込む博士ぢやない。却つて此叱言を待つてましたと言はん計り、滔々懸河の辯、最高學府の講堂で、得意の法律論を説明する格。

『緊急狀態なら、交番の前でも人家の座敷の中でも場所を構つてはゐられない、今や腹中の膀胱が破裂せんとする刹那ぢや。此場合に臨んでは、自己の生命を保持せんが爲、時によつては、人を殺しても差支ない。況してや、今茲で僕が放尿したとて、東京中洪水になる譯ではなし、毫も他人の生命財産に損害を與へる筈はなからう。』と喰つて懸つた揚句、呆れ返つた査公の鼻先へ、麗々と名刺を突付ける。

『やつ、牧野先生ですか、お名前は伺つてゐましたが、つひお顏を存じませんで……』と總本家に遇つては査公先生グウの音も出ない。それが度重なると、何時か大勢の巡査に顏を知られて了つて、其後相變らず喞筒の筒先を向けてゐる事があつても、『先生！今日も例の緊急狀態ですか。』と迄馴れて了つた。今度は博士の方が張合抜して、

『君等も此頃は大分法律思想が進歩して來た哩。』

▣電柱の瘤

同じく帝大教授池野成一郎博士と言へば、疎忽家を以て有名な人

だが、或る日の夕暮、大學からの歸途、何か考へ事してテクつてゐたが、思はず電信柱にコツンに衝突して、

『やあ、これは失禮、御免下さい。』と後顧向もせずサツサと急ぎ足これを見た一同僚、翌日博士に、

『池野君、貴方の疎忽には驚きましたな、昨夕貴方は僕にイヤと言ふ程突當つて、これ此通りこんな大きな瘤が出來たぢやありませんか。』とやつた、と聞いた博士、

『あつ君でしたか、それは飛んでもい失禮をしました。私は今が今迄打突つたのは電信柱だと計り思つてゐましたのに……』

▣大意張りの裸ん坊

今でこそふつつりと禁酒して了つたが、以前牛込神樂坂界隈では誰知らぬ者もなかつたHYと言ふ男、醉へば眞つ裸になつて、褌一つせず大手を振つて毘沙門の縁日を濶歩する。所轄署でも度々世話を燒かされるので、遂には

『又あの男か、始末に了へない醉どれだ、打捨つて置け。』と見て見ぬ振の放任主義。

早稻田の出身、英文も達者なら、筆も相應に立つ男、巡査なんか眼中にないのだから堪らない、迂濶取捉へて說諭なんかしやうもの

なら、却つて手數が懸るので右の始末。

牛込署長の某氏が死去した通夜の晩、のこ〳〵と押蒐けて行つて其言葉が振つてゐる。

『僕は平素署長に一方ならぬ厄介を懸けて其恩義は深く感佩してゐる。其署長忽然として今や亡し矣、痛惜何んぞ堪へんやである。最後の告別が今夜と聞いては、何事偖置いても列席しなければならぬ義務がある。それで出蒐けて來た、おい諸君僕にも告別の一盃を酌まして呉れ給へ。』

嘗つて醉つた紛れに戸山の原へ飛出して、例の濶歩を試みてゐたが、急に何思つたか、一本の立木と相撲を取始めた。處へ角燈を照

らしてやつて來たのは巡査君、

『おいこら何をしてゐるのかつ。』とお定りの詰問、

『あはゝ、僕は此木を引拔いて庭へ植えようと思ふのだ。』

『莫迦つ、爾は氣違ひか。』

『莫迦でも氣違ひでも敢て君の干渉を受けん。』

『生意氣な事を吐すな、此練兵場の樹木を引抜けば立派な森林盗ぢやないか、容す事は出來ん、署迄同行せい。』

牛込では顔が賣れてゐても、新宿署の管轄内にはまだ此男の醉名が聞えてゐなかつたと見えて、否應なしに新宿署に引つ張られて、形の如き訊問、

『職業は何ぢや？』

『著述業！』

『何に著述業？　嘘を言へ、苟めにも著述でもする者が、こんな莫迦な眞似をするかッ、此處を何處だと思つて居る？』

『此處は警察署だと思つてゐる、だから君が職業上の訊問に答へて曰く著述業！』と平然たり矣である。

『よしつ、儞は警察で嘘を言ふな、儞は著述業と言ふ風體ぢやない何處かの破戸書生だらう。』と嵩にかゝつて怒鳴られたも道理、洗ひ晒らしの浴衣一枚と言ふ身姿。

『あはゝ、君等はまだ著述業の意味を解してゐないやうだ、著述と言ふのが絹の衣服が書くのぢやない、此頭腦の命令を筆に傳達するのだ』

『生意氣言ふな、よしそれなら本職が作文の問題を出すから、それに應じて書いて見ろ、もし書けなかつたら非道い目に遇はせるから……』

一晩留められて翌朝アンケラケンと立戻つて來た先生、人に語つて曰く、

『警察で作文の問題を出されたのは始めてだつた。』

▣乘過ぎ酒

國民黨の名士故櫻井一久氏も大の酒豪であつた。生前の逸話も壺中の趣味から湧いて出たのが多い。

或る年、姫路から大分お神酒の廻つた身體を汽車に乗せて神戸へ歸る途中、遂ひ好氣持になつてグー〳〵高鼾、

『もし〳〵、貴郎は何處迄お出でございますか。』と搖起されて、醉眼トロリと見開くと切符を改める專務車掌君である。

『乃公かい、乃公は神戸へ歸るのだが、まだ時間もあるだらうからもう少し寢かしてくれ。』と又もやゴロリと横になる。

『戯談言つてはいけません、もう疾の間に神戸は通過して了ひました。』

『ゑつ。』と遣がの一久氏もこれには少しく驚かされて、

『何に神戸は通過して了つた、一體此處は何處なのだい？』

『呆れますね此次ぎは米原です。』

一睡の夢に五ケ國を飛越して了つたには、車掌の呆れるよりは、聊か御本人が呆れた體、

『氣が利かない、同じ手間なら神戸で起してくれゝばいゝに……』

と言つて見た處で追付かず、無賃證を示して米原驛から逆戻り。

『えゝ莫迦々々しい、折角醉つた酒も醒めて了つた哩。』と更に正宗の大瓶を二三本買込んで、冷酒でしたゝか呷つた末、

『どれ先刻の續きの夢でも見ようか。』と又もやグッスリ寢込んで了

つて、列車が何處を駛しつて行くのか薩張知らず。それでも今度は車掌に起されもせず、程經て眼を覺まし、

『もう神戸近くだらう。』と停車した驛を車窓から覗いて、

『こりや奇怪しいぞ。』

奇怪しいも道理、更に五ヶ國を舞戻つて、着いた驛名は墨黒々と

『姫路！』

▣底抜け籠

友人仲間に

『あゝ彼の疎忽家か。』で通た男、湯屋で自分の子と他人の子とを間

違へて、

『何を惡戯してゐるんだ、さつさと上がらないか。』と尻つぺたを一つピシヤリ、

『ワッ』と泣出した顏を見て、

『ホイ失敗つた。』

此先生だ、祖母さんの葬儀に、途中行列のお供も氣が利かないと寺を聞いて置いて電車でお先きへ失敬して、もう來る時分と待構へてゐると、繰込んで來た葬式の一列、

『おや變だな、祖母さんの葬式にしては伯父さんも來てゐないし、それに知らない人の顏計りだ。』とは思ひながらも、殘りなく濟ま

せて、家へ歸つて來たはよかつたが、其翌日伯父の許を訪ねると、眼の色變へて立腹の體、

『おい儞見たいな恩知らずはないな、平素あれ程何に斯につけて厄介計り掛けてゐやがつて、他の事とは違ひ、例令どんな事があらうとも葬式には來てもよさうなもの、以後儞のやうな恩知らず は家の敷居は跨がせない、伯父でもない甥でもない。』と頭から我鳴られて、少からず面喰つたが、

『冗談言つちやいけません、僕はちやんと燒香迄濟ませて來ました よ。』と反駁すると、

『こらつ、儞は俺を盲目だと思ふかつ。』の大雷。

『誰も伯父さんを盲目だとは思ひません。』

『よくそんな圖々しい事がぬけ〳〵と言へるな、俺が盲目でないもの とすりや儞が葬式に列して燒香迄したのを施主の俺に見えない筈があるか。』

『おやつ、では伯父さんも行らしつたのですか、僕は何處探しても伯父さんの姿が見えないので、こりやひよつとすると身體でも惡くして……』

『莫迦つ、俺は此通ぴん〳〵してゐる哩、母親の葬式を誰に賴む奴があるものか』

『でも伯父さんはお出でがなかつたやうですが……』

『巫山戯るな自分の恩知らずを棚に上げて置きやがつて何處迄言抜ける積りだ？』と風雲益々穏ならず、立腹の原因と本人の辯疏とが根つから疏通しないから、何時迄經つても果しがない、奴さんも遂には中つ腹になつて、

『いくら伯父さんが何んと言はうとも、行つたものは行つたに相違ないです。』

遺憾ながら見知つた顔の證據人を立てる譯には行かないので、双方怫然しながら解決付かず了ひに別れて、家へ歸つて來ると、細君が、

『貴郎、妙な葉書が來てゐますよ』と差出すを腹立紛れに引つたくつて讀んで見ると、黒枠付の禮狀に曰く

『昨日は遠路の處態々御會葬下され有難く存じ候拜趨の上御禮申上べき筈には候へ共何かと取込中乍略儀 以葉書 御禮申上候敬具』

とあつて、差出人は見も聞きも知らぬ藥研堀の下駄屋の名であつた

『こりやどうした間違ひか。』と後でよく尋ねて見ると、寺も同じ、時刻も一時間と異つてゐなかつた爲早合點して未知未見の死者に、恭しく燒香迄して、肝腎の祖母の葬式が繰込む時分には、既に歸途の電車に乘つて了つたのであつた。

もう一つ此先生の失敗譚を紹介する。

或る夏の事、ふと風流氣を起して、緣日の虫屋から鈴虫を籠に入

れて買つて來た。

『おい鈴虫の音が餘り好いので一疋買つて來たぞ、椽側へ釣して置け。』と細君に命令する。

『あらさう、鈴虫と言ふ虫はどんな虫なの？』と細君鈴虫には初の御見得と見えて、頻りに虫籠の中を覗いてゐたが、

『貴郎、虫がゐないぢやありませんか。』

『莫迦言へ、買つて來たものがゐない筈があるか。』

『だつて何處見たつて鈴虫らしいものは入つてゐませんよ。』

『虫籠の上の方にでも止つてゐるのだらう、目の惡い女だな、どれ僕が見てやらう。』と今度は夫子自身虫籠を手に執つて檢査したが

あら不思議、先刻慥かに一疋六錢也を投じて買つた鈴虫の姿が見えない、

『眞逆に忍術を使つたのではあるまい。』と頻りに小首を傾げながら電氣の灯に翳してゐると、細君急に頓驚聲を發して、

『あら貴郎、其籠には底がありませんね。』

得意然と垂下げてくる途中、底を振り落して了つて、虫籠にはあはれ名殘りの胡瓜の一切！

圓筆丸鍋

軍馬を去勢して、さて其摘出た筆丸は眞逆に消えて失くなる譯で

もあるまい、燒いて了ふか捨てゝ了ふかと言ふ疑問を、或る近衛騎兵聯隊の一下士に提出して見ると、

『さうさ瓶詰にして保存する譯でもないから、當然捨てゝ了はなければならぬのだが、いくら馬匹だつて國家の爲とは言ひながら、可愛想になくてはならない大切な處を犧牲にさせるのだから、其處は人情として、軍馬が報國の赤誠凝り固つて二つの睾丸となりあはれ胎内から拔出て了ふ代物を、無慘々々と掃溜に捨てるには忍びない、其處で此尊い犧牲の一物は、軍馬が無限の恨みと共に清淨なる地中に葬つてやる事となつてゐるが、それは表面、何しろ精氣集注した得難い代物を、空しく地下に埋めて了ふのは惜しい我々の愛馬心から、更に内證に其葬り場處を撰んでやつてゐる。』と言ふ。

『はてね、其葬り場所を更に撰んでやると言ふのは？……』と訊くと、

『あはゝ、獸醫殿でもお氣は付くめへと言ひたいが、内々承知で默許してゐるのかも知れんよ、何を隱さう我々の腹中に葬つてやるのさ。』

『ゐつ、では睾丸を君達は喰ふのかい。』と呆れると、

『何も驚く事はないぢやないか、牛の舌が洋食に賞美され、豚の膀胱が氷嚢となつて、人間の頭に上る位だ、精氣籠つた一物に我

々が舌皷打つのも敢て不思議はあるまい。代物が代物だから、あれ程精分のつくものはあるまいよ、軟からず固からず嚙しめる程味のある素敵な珍味だ。だから此獲物を我々がこそつと手に入れると、早速睪丸鍋で一杯の御定法さ、處で睪丸鍋から生じた珍談を一つ君に話して上げやう。』と前提して語り出したのは……

某宮殿下がまだ大尉で、近衛騎兵聯隊附の中隊長でゐらせられた時である。

例の獲物を運好く手に入れたので、早速ブツ切にして味噌煮の睪丸鍋、下士室を閉切り同輩三四人で、盛んにバク付いてゐると、突如、コツ〳〵と扉の外から叩音がある、多分新兵が何か命令の傳達

にでも來たのだらう位で、

『構はないから這入れ。』とやつたものさ。

音もなく靜かに扉を開けて目の前に立たれたは南無三寶新兵處の騒ぎぢやない、金枝玉葉の御身たる中隊長殿下、吃驚敗亡、

『氣を付けつ。』の姿勢で恐入つてゐると、殿下はお氣輕に室中を見廻されて、

『四角張んでもよい。』と有難いお言葉、

『大分馳走があるようぢやな。』とお目に止められたは、手品の種の睪丸鍋、

『しまつた。』と冷汗三斗でゐると、

『美味さうな匂ひぢや、牛肉かな。』とブツ〳〵味噌煮の一件をお覗きある、益々風雲急になつて來たので、一同顔を合せて御返事も出來ない、

『牛肉とも違うやうぢやが、これでも矢張牛の肉かな。』とのお訊ねには、穴あらば消えも入りたい塩梅、お答しない譯にも行かないから、

『これは馬肉であります。』

『ほゝう馬肉か、馬肉も牛肉と同じやうな味のものか。』

『少し臭くありますが、味噌を入れて煮ますと、却々美味くあります。』と額の汗を拭きながらお答申上げる。

『弓矢八幡、願くは殿下の御質問が、これ以上微に亘り細に入るなからんことを……』と祈願を籠めながらさ。

天祐忽ち臻る、厩舎で今日去勢した軍馬が、鍋に煮られてゐる代物の行方を恨むやうに悲しく嘶いた。

『おゝさうぢやつた、厩舎を巡視するから、誰か案内せい、大分苦しさうに嘶いてゐる。』と殿下の馬匹を劬る御心に、鍋の御質問から轉換せられたので、浮び上つたやうに吻と一息！

御先導申上げて、去勢した軍馬の厩舎の前へ御案内すると、悲しさうに首を垂れて、苦痛を訴へてゐる馬匹の樣子に凝乎とお目を留られて、

『何分痛むらしいな、何かこりや今日去勢したのぢやな。』

『はい、左様であります。』

摘出した痕を痛々しさうに御覽ぜられてゐた殿下、ふと何をお思ひ出されたか、

『あれはどうする？　捨てゝ了ふのか。』

さあ事！　一安心の甲斐もなく、退引ならぬ急所の御質問、けれど代物が代物丈に、殿下もそれと明白に仰しやらず、

『あれ……』で質問の要旨を會得させやうとなさるのだ、勿論我輩には此

『あれ……』なるものは、百も承知であつたが、態と御言葉が腑に

落ちない樣子を繕ふ苦しさつたらない、弓矢八幡も聞えませぬの體だ。

『あれとは何んでありますか。』

『判りさうなものぢや、それ摘出たあれぢや。』と益々危急切迫だ。

『摘出たあれと仰せになりますのは？……』と苦し紛れて骨頂である。

『まだ判らんか、玉ぢや〳〵。』と宛然戰線へ彈藥補給の御口吻！

萬事休すの絶體絶命、

『睾丸は先刻の馬肉であります。』

『ゑつ、では何か其方達はあれを喰ふのか。』と殿下も呆氣に取られ

て跡のお言葉すらない御様子。

『はい、戰場に立つて生死を俱にする大切な馬匹から出たものを、捨て了ふのは殘念でありますから、煮て喰ふのであります。』

『あはゝ』と此九死一生の申立に御哄笑遊ばした殿下、

『其方達は却々愛馬心があるのう。』

▣開いた口に羊羹

疎忽家で有名な男、親しい友達を本所に訪ねて、がらり格子を開けるか否や、例の通り氣兼遠慮もなく、挨拶なしに、ずか〳〵と上り込んで長火鉢の前へ大安座、

『何處かへ出蒐けたと見えて留守だな、まあ暫らく待つてゐて見よう、いようこりや大變な御馳走がある哩。』

猫板の上の菓子鉢には、今しがた切たての煉羊羹、

『開いた口に牡丹餅より結構だ、遠慮なしに早速御馳走に預からうか、幸ひ急須にも茶が入れてある、用意萬端整つてゐる處を見るに、今日俺れの訪ねて來るのを觀破して、ちやんと馳走の支度をして置いたと見える、けれど肝腎の主人公が留守は妙だな。はゝあ讀めた哩、奴さん此鐵瓶の湯の沸く間に、一風呂飛込みに行つたのだらう。』なんて手前勝手の一人合點、斷りなしに羊羹を嚙付いて茶を呑んでゐると、二階から、

『貴郎お歸りになつて!?……』と媚めかしい聲が絹擦れの音を伴つて來た。

『奥さん、僕拙者我輩だ、例によつて遠慮なくお初穂を頂戴してゐますぜ。』と何心なく見上ると、南無三寶、友人の細君とは似ても似付かぬ束髪姿。

『こりやどうした事たい。』と呆れるより先方の細君が呆れて返つた

『あらまあ〳〵』の連發も蓋し無理はない、案内もなく知らぬ家にずか〳〵と上り込む計りか、圖々しく長火鉢の前に主人然と座り込んで羊羹を斷なしにパク付いてゐるのだから、目を丸くして呆氣に取られて了つた。

『貴方は一體誰方です? 人の家へ無斷でお上りになつて……』

而も最愛の背の君へ、妻の心盡しを見せようと、茶迄入れて用意してあつた大切の〳〵羊羹を……との口吻は慥かに語尾に含んでゐる詰問。

『宛然狐に魅まれてゐるやうだ。』と柳眉を逆立てた初對面の細君をジロ〳〵見上げながら、自分の膝を抓つて見ると、生憎と夢にあらず寔に痛い。

『狐に魅まれてゐるとは何んの事です? 案内なしに長火鉢の前なんかに……』と憤慨措く能はざるの半面には、

『ひよつとすると此男狂人なのかも知れない。』と言ふ恐怖も潜んで

ゐるらしかつた。

『やつ、恐縮々々、遂心易立に……』

『心易立？　始めてのお方ぢやありませんか。』

『いや貴女には始めてだが、松田君と始終親しくしてゐる吉岡と言ふ者、以後お心易くして……松田君も奥さんも、今日はお留守で？』とそれでも友人の家と思込んで、此初對面の細君は屹度友人の親戚か何かだらう位の考。

『貴方の仰しやる事は薩張腑に落ませんよ、松田さんだとか、吉岡さんだとか一向お近寄はありませんが……』と形勢頗る險惡だ。

『ぁつ、では此家は松田君の家ぢやないのですか。』

『冗談言つちや困りよす、表札にもちやんと書いてある通り杉村芳雄の宅で、私は家内です。』

『やつ、こりや失敗つた、眞逆隣の家と間違へる筈はないが……』と頭を掻いてももう追付ない、無斷頂戴に及んだ羊羹は、既に胃の腑を通過して、小腸から大腸の方へ突貫して了つてゐる、表札を見ろとは頂門の一針だが、此疎忽家先生にそんな周到な用意を拂つてゐる暇はなかつたのだ。

『いや何んとも申譯はありません、遂友人の家だと計り思ひ込んだもんですから……』の言譯も聊か世間並に通用覺束ないのは、長火鉢安座の無遠慮と、羊羹パク付の不仕末！　顔から火の出る思ひ

で、穴あらば消へも入り度い恥晒し、頻りに詫びてゐる處へ、

『おい今歸つて來たよ、どうだい羊羹の御馳走は出てゐるかい。』と

ぶらり手拭を提げて風呂から戻つて來たのは、正に豫想通りであつ

たが、肝腎の御本尊は友人の松田ならずして、見も知らぬ人であつ

たには、羊羹の馳走云々の言葉が、針よりも痛く吉岡の耳を刺す。

『好い、處へ貴郎歸つて來てくれたわ、實はね……』と先刻からの

顚末を述立てる細君の手前、益々身を縮めて小さくなつてゐる。

『ぢやあ何かい、此人が僕の留守に……松田君の家だらうつてか、

それで羊羹を……はてね。』

『羊羹が何處迄祟るのだらう、情けない。』と今更吐出しもならず恐

縮してゐる吉岡の顏と、羊羹の皿とを七分三分に見較べてゐた新來

の主人、はたと計り膝を叩いて急に噴飯して了つた。

『あはゝ、こりや面白い、こりや奇抜だね、あはゝゝゝ。』と止度も

ない哄笑ひに、それとは知らぬ細君、

『こりや大變、狂人が傳染したのかしら……』とでも思つてか、

『貴郎どうなすつたの、そんなゲタ〳〵笑つて計りゐらしつて、も

し貴郎〳〵』と氣が氣でない。

『あはゝゝ、あゝ苦しい、あはゝは、判つたよ、判つたよ。』

『判つたつて何がです？』

『間違ひだ、面白い痛快な間違ひだ、あはゝ、此人の訪ねる松田君

と言ふは慥か僕が移轉してくる迄此家に住んでゐられた方だ、僕が其跡に移越して來たのを知らないで、此滑稽なのさ、あはゝ。

ねへ君さうでせう。それで事情判明さ、いや家内が何んにも知らないで、飛んだ失禮な事を申したか存じませんが、決してお氣に懸けないやうにして下さい、實は僕達は三日前此家へ移越して來た新參者、慥か前此家にゐたお方が松田さんとか言つたやうに記憶してゐます、多分貴方は此新陳代謝を御存知なく飛込んでゐらしつたのでせう。』

圖星！ けれど極りの惡い事は依然としてゞある、間違は有勝な事だが、羊羹一件がどうも體裁がよくない。

『さう仰しやられると何んとも申譯がありません、松田とは至つての心易立から、遂遠慮なしに上り込んで此始末、いやはや面目次第もない、何れお詫びに……』

『まあいゝぢやありませんか、これも何かの御緣でせう、緩乎してゐらつしやい、今家内に茶でも入れさせますから……』と快活な主人の言葉、

『いや其お茶が暗劍殺、羊羹が八方塞り、今日は何卒御勘辨願ひたい。』と這々の體で逃出して了つた。

『眞逆此儘喰逃も出來まい。』とあつて、其翌日藤村で羊羹の素晴らしい折を手土產に、

『こんな恥を掻かしたのも、松田の奴が無斷で移轉したからだ。』と自分の疎忽を棚に上げ、

『證人に松田を引張出さなければ顏が立たぬ。』と、松田の移轉先を訪ね當て、無理に連立つて、改めて昨日の家へ詫びに出蒐けた。

『こりや御叮嚀に、こんな事をされては却つて此方が恐縮します よ、あはゝゝ、これを御緣にお交際して下さい。吉岡さんも以前來馴れた家でせうから、おい〳〵羊羹のお蔭で急に友人が二人出來たよ、早く支度しろ、間違には羊羹がよからうが、打解けた仲に甘いものは御免だ、酒を早く持つて來い。』と捌けた主人の態度に松田も吉岡も敬服して、愉快に盃を應酬して、それからは三人

親しく往來するやうになつた。

■春花春情

露語では女のものをエビと言ふので、惠比須麥酒の販路に飛んだ崇りがあつて困ると言ふ。

嘗つて或る外交官が、貴夫人令嬢居並んだ晩餐の席上、さりとは知らずに、

『君、此蝦は莫迦に大きい蝦だね。』と日本語で耳語すると、生憎御當人の眞正面が、花のやうな令嬢、思はず顏を眞つ赤にして下を向て了つたさうな。

國は違ふが、支那で春洞と言へば、露語のエビと同意味である。それを麗々と雅號に附した有名な書家があつた。中橋現文相の號たる芳草閣主人の芳草も女の見せぬ毛の事である。

『時下春情相催し候處』と書翰文の前提も振つてゐるが、更に振つてゐるのは、或女學生の作文に、

『咲き亂れたる櫻の花は、人の心に春を唆りて、何となう身も心も浮き立つ心地こそすれ……』とは振つてる。

▣汽車に酒料

飛行機が盛んに蒼空を飛廻る今日、滊車なんか珍らしがる田舍者も無くなつて了つたかと思ふと、豈それ然らんや、さて〳〵世間は廣いもの、先年酒田線が開通した時、臍の緒切つて始めて滊車と言ふものにお目に懸つた。山間壁地の田吾作連中、

『俺ハア魂消けた。』處の騷ぎぢやない。

『あれ見ろ、細長い家を幾つも引摺つて馳けてくるぞ。』と呆れ蛙の面を並べた停車場に列車が停ると、

『はゝア、草臥れたと見えて、白い氣息を出してせい〳〵言つてゐる。』

酒田狩川間の賃金二十五錢と聞いて、

『そりや豪く高い。二十錢に負けてくんろよ。』

出札口での談判、

『そんな事は出來ない。』といくら言聞かしても。

『お上の仕事なのに、僅か五錢計り負けくれぬちう法があるか、負けてくんろよ。』

『お上の規則だから負けられないのだ。』と嚙んで啣めるやうに說得しても、

『お上の規則にそんな吝な事があるものか、ぢやもう一錢氣張るから……。』なんて手の附けやうがない。

其中遠慮のない滊車は、此押問答を他處にしてピーと出て了ふ。

『おい、其滊車を止めくんろよ、酒料を奮發るから……。』

さうかと思ふと、首尾よく列車に乘込んだ連中。

『やれはア、電信柱が後におつ走るぞ、目の廻る程おつ走るぞ、あれ〳〵庄屋どんの家が豆粒見たいに小さくなつて了ふわ、三等でこれ位早へのだから、上等に乘つたら余計早からうよ。』

▣古服に新服

大隈内閣でやつた總選擧の時、政友會にさる者ありと知られた金覆輪の福井三郎君と、同名異人が、奈良縣から候補者の名乘を上げて打つて出た。と聞いた本物の福三君。

『おや〳〵贋物が飛出し居つた哩、もし奴が當選でもしたら、世間

では二人を何んと言つて呼び分けるだらう、新聞紙などでは差向き岡福、奈良福とでも書立るのだらうか、それとも乃公が金覆で今度のが銀覆、銅覆かな。』と言ふと傍人。

『君が本店で今度のは贋物だから、本福、贋福と區別を付けるとよからう。』と油を浴ける。これで福三君大いに納つてゐると、更に口の惡い一人が、

『それよりは、君を古福、先方を新福とやつて柳原（東京の古着市場）の店晒しを發表すると尙面白からう！』

▣草餅違ひ

東北の或地方では賣春婦の事を草餅と言ふ處がある。草を敷寢の假枕から來た隱語か、或は又田舍臭いを表白した名稱であるか語原の穿鑿は兎も角、此草餅で飛んだ失敗を演じた珍談がある。

呑氣者の連中三人が東北地方へ用事半分遊び半分で出蒐けた時、とある一小驛で滊車の時間を待合してゐたが、徒らに停車場の待合室で、ホカンと口を開けてゐるのも莫迦々々しいとあつて何處か茶でも飲む處はないかと目廻すと、幸ひ驛前に一寸とした休憩茶屋があつて、看板に記して曰く『名物草餅』

『道田舍で草餅の名物は恐入るが、何も話の種だ、一つ抓んで見ようではないか。』

此『抓む』が飛んだ抓むに相通じてゐるとは、神ならぬ身の知る由もない。三人飛込んで、

『おい、草餅を呉れないか。』

『入つしやい。』と言ひながら、三人の頭の頂邊から足の爪先迄、一亘り眺め廻した婆さん、

『冷たい草餅ですか、温かい草餅ですか。』の質問、妙な事を訊くものだとは思つたが、多分温いの意味は、出來立をさう言ふのだらうと早合點して、

『温い草餅に限るな、是非共温い草餅にして貰ひたいね。』と言つたものさ。

『さうでせうね。旦那方の御人體では、冷たい草餅はお氣に入りますまいよ。』と改めての一瞥、にやりと笑つて。

『奥座敷が明いてゐますから……。』と案内する。

『何に此處でいゝよ。』とは言つたが、まだ時間もある事だし、椽臺の鼻先で、大口を開けてバク付のも、餘り格好のいゝものではないと、遠慮は無用で三人ながら奥の一間へ入り給ふとござい。

四疊半の眞中に茶卓一つ、座敷の飾付は簡單を通り越して物淋しい、疊も摺切れて燒焦の負傷頗る慘たるもの、座布團を据へた婆さん、澁茶など勧めながら、更に一亘り三人の顔をすらりと眺めて、更ににやり、

『今しぐに來ますから……。』

『來ますつて、お前の家で拵へるのだらう？　早くしてくれ。』

『へ、、、さうお急ぎなさらないでもようございんしよう、旦那方の前に出るのにはしこし位は白粉でも塗つてね、へ、、、、まあお酒でも燗けませうよ。』

何が何やら薩張意味不徹底の言葉を殘して、ぽかんとしてゐる三人を置去り！

『おい、今婆さんが言つた事は判つたかい。』

『いゝや、判らんね、眞逆草餅に白粉を塗る譯でもあるまい。』

『おつと、君はそれだから融通が利かないと言ふ奴さ、草餅に白粉

を塗ると言つぱだね、こりや適つ切此邊での通り符諜さ。』

『はてね。』

『愚案するに、出來たての草餅は、手に粘着いて拵へ憎い、其處でだ、手に粘着かないやうにそれ白い粉を塗る、蓋し草餅に白粉とは此意味なのだらう。』

『成程な。併し草餅を喰ふのに、お酒を燗けませうは頗る珍ぢやないか。』

『其珍なる處が田舍なのだから、醉醒に冷たい汁粉が一寸乙なものだから、案別草餅で酒を飲むのも、變つた味があるかも知れない寧ろ目の赤い鰯なんか煮付て出されるより危險が少ないだらうて

……』なんて屁理屈をこぢ付けて、草餅の出現を待つ事稍暫し、遽かに家鳴震動、氣の小さい土鼠は氣絶して了ひさうな足音、少からず膽を冷してゐる障子をがらりと押開けて、

『今日は……』とも何んとも言はず呆れ返つて目を圓くしてゐる鼻先へ、大道臼を鎮座ましました怪物三人、石灰藏から飛出して來た溝鼠か、急拵へ鏝細工の白粉下から、眞黑な生地が剝げ出てゐるお面相は揃ひも揃つて人三怪七、此米の高い時節にさりとて不經濟な梅ケ谷糞つ喰への御體格、差詰電車に乘せたら車掌から、

『大きなお臀はお膝に願ひます。』の新用語を浴びせ蒐けられさうな代物。

『お酌』とも何とも言はず呆氣に取られてゐる三人の傍へでれりではなくごろりと麥酒樽を轉がし來つて、

『へい。』と盃を突付ける。

『おい／＼、一體お前達は何んだ？』と面喰ひながら訊いて見ると

『へ、、、そんな野暮な事は聞きつこなすにしませう。』と來る。

『茄子でも胡瓜でもいゝが。一應は此座敷へ御尊來の主旨を伺つて置ないと籔から棒では少し恐入るからな。』と言つても一向先方にお通じなし。

『お酒でもお飲みなさいよ。』と强壓的に突付けられ仕方なし／＼一二杯地酒のツンとくる酒を我慢する。

『何かお唄ひなさいな。』

狐に魅まされたやうな鹽梅、能ふ可くんば此女達が、もう少し雁首を取替へて來てくれたなら、隨分飲みも唄ひも出來るが、土鼠殺しの勇婦怪婦では、お酌も願ひ下にしたい位。

『おい、少し變だぜ。』

『變も變も大變な代物に出遇した哩。それに一體此處の婆さんが吐かした文句も、今考へると腑に落ちないぜ、所謂君が草餅の解釋論も、斯うなつてくると大分權威がなくなつてくる。一つ婆さんを呼んで訊いて見ようよ。』

『うん、よからう、どうも頼みもしない酒などを擔出したり、會體

の知れない怪物共を酌に出す樣子は、呆れの虫が吃驚仰天して先刻から面喰ひの體だ。』と呟き合つてゐると、羅生門の鬼の手がスツと延びて來て。

『ねえ、陽氣に騷ぎませうよ。』

『わつ、こりや愈以て事だ、誰か早く婆さんを呼んで來ないか。』

『何かお誂へ、おすゝ(壽司)でも取りませうか。』と却々喰氣には拔目がない。

『いやもう、眞平々々、瀉車の時間もあるから、さう緩乎してはゐられない。』と體よく逃げを張ると、

『おや忙すないのね、さう急がなくつてもいゝでせう。』

『おや、何んだつて……。』

『佐倉宗五の子別れよりも、主すと別れが猶辛らいとは何んて間がいゝんでせう。』と前世紀の流行唄を豚が絞殺されるやうな蠻音で唸りながら、

『ねえ、種ちやん。』と來る、もう一人が、

『さうとも〳〵、瀉車が出たなら泊まつてお出で、今宵一夜の女房振りとね。』と合槌を打つ。

『乘遲れたつていゝでせう。まあ緩乎遊んでいらしやいよ。』と又一人が腕力に訴へても此處一寸も立せはせじの權幕。

『おい助け船だ、婆さん〳〵！』と事態頗る穩かならずで我を忘れて大聲を上げると。

『大層優遇ますね。』と有難迷惑な氣を利かした積りで、噛むとがり〳〵しさうな海苔卷のおすゝなるものを大皿に盛つて、

『お腹が減るといけないと思つて、澤山持つて來ましたよ。』

『冗談ぢやない、何んだつて賴みもしない食物を矢鱈擔ぎ込んだ。』と中腹になつて怒鳴付けたが一向平氣、

『でも旦那方の召上るやうなお肴が生憎切れてゐるので……。』

有難い哉。此砂晒しのおすゝを嚙る御人體に下落して了つた。

『途呆けちや困るよ、誰が酒だの肴だの賴んだい、僕等の注文したのは、草餅だ。出來たての溫かい草餅丈だ。』

婆さん矢庭に黄色い齦迄さらけ出して、

『ヒ、、』と笑ひ出すと、怪婦連も言合したやうに、

『へ、、』と氣味の悪い笑聲を上げて、

『此お客様はみんなお急ぎなんですよ。』

『お急ぎ？　僕達は温かい草餅の急ぎなんだ。』

『だから温い草餅を三人呼んで上げたではありませんか。』

『君つ。』と三人顔見合せて何が何やら薩張譯が分らなかつたが、前後の様子から漸くそれと感付いて、

『あつ成程、先刻から道理で様子が變だと思つてゐたが……。』と今更のやうに怪婦のお面體をつく〴〵と眺め廻して、

『ぶつ、草餅違ひは驚いた、桑原々〴〵、婆さんこりや飛んだ間違ひだ、僕達の誂へたのはこんな臭い草餅ぢやない、喰ふ草餅だ、餡の入つた草餅だ、危險々々、おい總員退却つ！』

▣飛んだ的違ひ

東郷吉太郎中將が嘗つて臺灣總督府參謀長時代に、支那の福州へ出張した折の事、南支警備艦明石が、馬尾に投錨すると、どかどか中將（當時少將）の宿屋迄襲撃に及ぶ。

馬尾一輪の名花、宿の女中名からしてお花、我こそ拔駆の切名と内々眼を着けてゐる者も多かつたが、此道に上官部下の區別はない

筈と手つ取早く直接談判と出蒐けた一水兵、
『當つて碎けろ。』と秘密條約を呈議して見ると、案ずるより產が易いの譬、造作なく締結が出來たので、天にも昇る心地、約束の時間を首を長くして待兼てゐた。

さて夜も次第に更けた十二時過ぎ、時分は好しと件の水兵、扳足差足豫て諜し合せた二階の一室に忍込んで、手探りに探し當てのは女の黑髮ならで髯むじやな男の顏、
『南無三寶！』と狼狽て逃出さうとする暇さへあらせず、
『泥棒つ。』と大喝一聲、勃然と計り起上るや否や、引捕らへて捻伏せ、

『待て〳〵面を改めて呉れる。』と電氣を點けて、
『何んだ爾は!?』とこれも亦意外の體、
『わつ、閣下でしたか。』と穴あらば消へも入りたい水兵の顏を眺めて、暫らく無言でゐたのは、目的物とは似ても似付かぬ鬼より恐しい東郷閣下、
『讀めた哩。』と小膝を叩いて、
『おい〳〵寢惚けて戸迷ひしちやいかんよ、此室は俺の部屋ぢや、爾の目的物は此室にはゐないぞ。』
翌朝やつて來たお花、クス〳〵笑ひながら、
『閣下、昨夜此室へ誰か來やしませんか。』

『さてこそ……』とは思つたが、何喰はぬ顔の中將、

『うんにや誰も來やせんが……おい罪な眞似はせんで置けよ。』

▣まるで落語

『もし〳〵私は江木ですが……』と去る處へ電話をかけた前書記官夫人、

『エビさんですか。』

『蝦ぢやありません、江木です。』

『へエ葱さん？』と來た、夫人少々癇に障つて、

『手前は魚屋や八百屋ぢやありませんよ。』

『八百屋でない禰宜さんだと、何處かの神主さんですか。』

『冗談ぢやありません、江木です、エーギ、判りましたか。』と語聲を强めると、先方では又聞違へて、

『へービ、蛇さんと言ふ御苗字は珍らしですな。』とまるで落語。

▣糞尻の交り

頭から蔽かぶさるやうな五月闇は、上野の山を眞つ黑に包んで了つて、平素なら月の光り電氣の燦きで、金波銀波を躍らせる不忍の池も、宛然灰を撒かれたやうな濁りを見せてどんよりと沈んでゐた終電車が通過つてから二時間も經つ眞夜中、大兵肥滿の壯漢が、

微醺の頰を夜氣に打たせながら、池の端をぶらり〳〵とやつて來たが、何を見付けたのか、ぴたり足を停めて、猫が鼠を覗ふ格好！

身投か、あらず、そんな人助けの慈善心ではない、辨天への曲り角、花は二夕月前の泥土に塗みれて了つた葉櫻の根方に、眞丸く蹲つてゐるのは慥かに白犬。

『此畜生、此處にゐやがつたか。』と足許を摩探つて、手頃の小石を拾取り拔足差足、夕顏棚の此方よりの體、敵に悟られじと窺寄る。

……

此男姓は朝井名は辰雄朋黨知人の間で有名な變者ではあるが、何も申年の生れで、性來犬が大嫌ひと言ふ譯でもない、さりとて親が

狂犬に嚙附かれて不慮の横死を遂げた不倶戴天の仇讐と言ふ次第でも勿論ない、さらば出來心の惡戯から、寢耳に水でなうて礫のお見舞かと言ふと、そんな罪作りを喜ぶ茶目でもないのだ。

何を隱さう、腹一杯夕飯を詰込んだ懶うさが、今から寢るのも智惠のない話と、足の向次第は時間潰し腹ごなしに友達の處へでも押蒐けてやらうと、ぶらり下宿を立出で、上野の山を通拔け、此池の端へ通りかゝつた時、突如嚙付くやうに吠立たは白い尨犬。

『叱つ〳〵。』と逐へば逐ふ程、足許へからみ付いて吠立てる。

『俺りや少し人間離れがしてゐるかも知らぬが、眞逆泥的の人相を具へた譯でもあるまい。』と聊か憤慨して、

『こらつ、何を人間違ひをしてゐるのだ。』と怒鳴つて見た處で、白犬先生には一向通じない、益々けたゝましく吠立てる態度は、正に『曲者茲に在り。』の檄幕、これが薄暮だつたからいゝものゝ、時間過ぎての眞夜中なら、

『おいこら、一寸署迄同行せい。』と引張られるは必定、道が無頓着の男も、少々腹を据へ兼て、

『此畜生、まだ吠えるか。』と二三歩飛退つて嚇しの礫を拾はうとする途端、何に躓いたか平素講道館の初段を以て誇る大の男が、素つ天ころりの始末、餘んまり見つとも好い圖ではない、鳥鍋の二階から下瞰してゐた素人らしからぬ女客が、

『おほゝ。』と笑つたのも無理はない。

癪に障つたは強ち白犬のみの故ではなかつたが、何處へ尾の持つて行きやうもない殘念さが、むら〳〵と胸に込上げで、

『畜生、唯置くものか。』と起上るが否や、韋駄天の如くに追蒐けて見たが、先方は足が二本多い。いくら短距離競走では退けは取らぬ強の者も、犬とは競走が出來なかつた。

『無念、長蛇を逸したか。』と次團駄踏んだが後の祭り、泥に塗れた着物を拂つて、山下の通りに飛出して了つた。

行き當りばつたりに友達を訪ねて、思はず時間を過した歸途、場處も同じ先刻の池の端、葉櫻の蔭に、此怖るべき強敵が覗ひ寄ると

は夢にも知らぬ白犬の哀れさ。

『畜生、先刻はよくも俺に耻を掻かし居つたな。』と怒を啣んで逆襲の顚末とございであつた。

歩一歩、忍び寄つて、狙ひ定めた礫の一撃、兵發矢！

正に手答へはあつたが、

『キャン。』と叫んで逃出すべき筈の白犬が、

『あつ痛い。』と人語を發して暗に消えて了つたは。此頃流行の忍術を會得した譯でもあるまいと、不思議の眼を睜つてゐると、

『貴樣か、俺に石を打付けたのは……?!』と凄まじい權幕で鼻の先へ現れ出た大の男！

『おやつ。』と計り呆れたが、唯呆れた計りぢや事が納まらない。

『何んだつて俺に石を打付けたのだ？』の答辯をしなければならない羽目になつて了つた。

『さりとは奇妙、こんな野郎が暗に隱れてゐたつて、眞逆白犬と間違へる筈もない。殊更夜目に透かした着物は紺絣、いくら五月闇の眞夜中でも、白と黑も誤認する程の色盲ではない筈。』と小首をひねつた揚句。

『おや、君は犬ではなかつたのか。』と珍無類の奇答反問、對手の男も思はず呆れ返つた。

『何だ犬ではなかつたか？　莫迦にするな、斯う見てもまだ四つ足

の仲間入はしないぞ。』

『こりや失敬、何も僕は君を犬だと侮辱した譯ではないが、余り君が犬に似てゐるので……。』

『巫山戯た事を吐すない、犬に似てゐるとは何んの言草だ、人が尻を捲つて糞をしてゐる處へ、突然石を叩付けやがつて、見ろこんなに尻が膨れ上がつたぢやないか。』

疑問解決！白犬と見間違へたのは此男の尻だつた。

『やつ失敗々々、何んとも申譯がない、實は君の尻が素晴らしく白いので、先刻吠付かれた白犬と間違へたのだ、さう怒り給ふな、何も惡氣で君が折角好い心持に糞をしてゐる尻へ、石を打付た譯

ぢやないのだ、災難だと諦めて勘辨して呉れ給へ。』と瓢逸極まる辨疏には、對手の男も苦笑せずにはゐられなかつた、

『人間の尻と白犬と間違へる君は余つ程疎忽しいな、痛いけれどまあ我慢して置かう。以後は氣を付け給へ。』

『白犬に髣髴の尻に、さう度々出遇して堪るものか。』とは思ひながらも、罪は正に我に在り矣。

『さりとは尻ませんで、糞とに濟まなかつた。』と洒落のめした圖々しさ、對手の男ももう怒る勇氣が挫けて了つた。

『仕方がない、飛んだ痛い災難で、出かゝつた糞が引込んで了つた哩、忌々しい。』と捨臺辭、右と左に別れて了つた。

『あはゝ、人間の尻と、白犬とは全く間違ひが非道過ぎた哩、けれど彼奴面に似合はず可厭に尻計り白い野郎だ。』と自分の罪を棚に上げた虫の好さ、我知らず噴飯ながら、權現の石段を上つて、動物園傍から、山内を抜けやうとする行方に、怪しや人の潜む樣子。

『此夜更に……さては盗賊！』と自分が夜更に迂路付いてゐる事は忘れて了つて、

『今度こそは……。』と得意の蹴腰、講道館仕込の腕前を見せてやらうと、足音忍ばせて覗ひ寄るを、早くも感付いたか、先方でも、

『此奴曲者！』と素破と言はゞの身構へで、ぢり〳〵と油斷なく近寄る途端、仄白い瓦斯燈が、木下闇を洩れて二人の顔を照らし出し

た。

『やつ、先刻の犬君か。』

『さう言ふ貴樣は先刻の疎忽家か。』と張合抜した顔を突合はした。

戀ならぬ礫が縁となつて、それから變者の二人は急に親しい友誼となつた。頒頸の交りと言ふ事はあるが、糞尻の交りとは蓋しこれが嚆矢でがな…あらう。

▣新式機關車

先年閑院宮殿下が東京驛にならせられた時の事、御先導の高橋老驛長に

『日本でも此頃は却々汽車が進歩したのう。』と仰せられる、此突然の仰せには、道が鐵道院の活字引で通つてゐる老驛長も、何が何や、ら薩張合點が行かず、殿下のお顔を見上げてゐると、殿下は莞爾々々お笑ひ遊ばして、

『其方が氣が付かぬとは不思議ぢやな、此頃日本で新發明の機關車が出來たさうぢやが……。』

『新發明の機關車と申しますると……？』とお言葉の意味を解し兼て伺ふと、

『何んでも運轉手を乘せないで駛る機關車が發見されたとの事ぢやが。』

此御諧謔には、道の老驛長も只々恐入る他はなかつた。と言ふのは、其年の春、運轉手が齒止を施すのを忘れた過誤から、停車中の機關車が、氣紛れにも斷りなしに動き出して、車止を突破し、お隣りの常盤橋病院の階上に、

『今日は……』とも何とも言はずお見舞申した揚句、死者一人を生ぜしめた椿事を諷せられたからなのであつた。

▣將軍樣の親子丼

世が世であるなら、十六代將軍と崇められて、下坐制止觸、素町人の分際では、迚もお目通相叶はぬ江戸八百萬石の大殿樣德川家達

公、貴族院議長として令名高く、遉は葵門第一の長者たる風采を偲ばせてゐられるのが、至つての平民主義、角力が大のお好きとあつて、櫓太鼓の音が朝風に響き渡ると、雨が降つても鎗が降つても、議會さへなければ十日が十日御見物の熱心さ。溫乎玉のやうなお顏が、皆を細くして土俵の勝負に見惚れ給ふ、晝の食事にも立つ暇さへ惜しいと思召してか、金五十錢也の親子丼をお取寄せあつて御膳番のお毒味もなく召上る手輕さ、

『豆千代さん、あれが德川樣だよ、昔しなら十六代の將軍樣で、私達なんか迚も拜む事さへ出來なかつた尊いお方だよ。』と姐へさんから敎へられた雛妓の一人。

『あらさう!?』と遠くから公の顏を穴の明く程眺めながら、小聲で曰く、

『將軍樣も矢張親子丼を喰べるのね、さうして私達と同じやうに口を開いて喰べてゐるわ。』

■支那珍說 鼻抓み

話も此處迄下がれば行止りだ。事の序に汚ない糞物語を御披露に及ぶ。

『出恭』何んと奇拔な文字ではないか、恭しく出づる、何が恭しく出づるかと思ふと肛門から呵呑の聲と諸共に降誕する長形の人造香

料であるから恐入る、道がは文飾の妙を極めた支那丈ある。

又『走動』の文字を用ひるが、走り動くでは多分下痢でもした時の事でもあらうかと思ふと一笑を禁じ得ぬ、何んにして支那では、此糞臭を日本程不潔視してゐないから妙だ、成程人間が食物を喰つたからは、必ず其粕を排出せねばならぬ理屈、釋迦も孔子も、乃至は窈窕たる美人も、同じ人間何も不思議はあるまいなどゝ飛んだ處で力むとそれ〳〵出そうになつてくるわ。

野糞は支那の名物である、滿洲の片田舎などへ行くと、妙齡の婦人が、百里山なき曠野の眞只中で、碧空を仰ぎながら盛んに奇臭紛紛の排出作用をやつてゐるのは、關西名物女の立小便以上の觀物

である。さうして高粱稈や石塊を落し紙の代用にして平氣でゐるのは一寸日本人には眞似の出來ない經濟思想である、更に徹底すると豚や犬を呼んで尻を舐めさせて簡易な清潔法の施行には呆れざるを得ない。宜なる哉、支那の文語では厠の事を圊圄と言ふ、口の中に豕がゐて、尻を舐めるのを表示し、青々たる曠野の中で青天井を眺めながら、佛子降誕を行ふ野糞を表示してゐるから甚だ理屈に叶つてゐる。

北滿へ行くと牛糞を乾燥て燃料にする、況してや萬物の靈長たる人間の糞である、豈それ徒づらに捨つ可んやで、喇嘛教徒は活佛の糞尿を又と得難い珍寶として、病人などは有難く服用する

こんな塩梅だから、宿屋などでも室内に便器を置いて、同室の合客が食事の最中、ヂャア〳〵やつたり、ボトン〳〵やつたりするのが平氣であるに至つては、潔癖な日本人は思はず鼻を抓まざるを得ない。

何も話の種と、或る日本人が姑娘遊びに出蒐けたと思ひ給へ、敵娼の姑娘、寢臺續きの片隅に雲隱れ、

『はて不思議、眞逆間夫との逢引でもあるまい。』

とそつと流し眼を注いで耳を欹てると、豈圖らん室の片隅金巾の幕張内で、ヂャア〳〵と時ならぬ驟雨一過、さて其後はボトン〳〵と腹中から下界へ佛子降誕の音だ、夜が更けてゐるから手に取るやう、有難からぬ臭ひは遠慮なく鼻邊に襲來してくる。

一夜の出來心も、あはれ其移り香を身に泌みて、臭い土產話になつたさうな。

▣これでも日本語？

『スブヤ公園(日比谷公園)ホンズ(本所)スバ(芝)三田方面のお方はお乘替！』とやられては、慥かに江戸つ子は間誤付いて了はふ。

『シダ町とはハテ何區にあつたらう？』と小首を傾ねるも無理はない。これが神田須田町たるに至つては、東京市の電氣局たるもの、先づ車掌用語を募集するよりは、乘客一般に東北語字典の配布が

緊急の必要であると建言したい。

政友會にさる者ありと知られた小林源藏君、自ら大の鐵道通を以て任じられてゐるのは結構だが、議政壇上盛んに此お國訛のメートルを上げるに至つては、哀れ速記者連中、

『ハテこれでも日本語かしら……』の嘆稍久しうすであつた。

『東京ス(市)の學シー(學生)モスクは(若しくは)勞働者』と言ふかと思ふと、

『會サ(會社)』がどうの『電シ(電車)』が斯うのと珍無類の發音續出果ては身振手振迄附錄を付けて滿場をあつと言はせる。

『日本語でもつと明瞭に……。』と彌次る者があると、源藏先生勃然

になつて、

『これ程明瞭の演說が判らないとは怪スからん、論ス(論旨)はチウシ(終始)一貫してゐる。』と威張出す、速記者連は呆れ返つて鉛筆を投出す途端、追がお味方の政友會も困り顏に、

『論スは分つたから簡單にス給へ!』

▣ぬか喜び

古島一雄君の貧乏も選擧名物の一つであつたが、細君がどうかして一度でもいゝから、歲費なるものゝ顏が見たいと日頃から念じてゐられた、すると其思ひが叶つて、先年の議會解散當日一箇月分の

金百六十六圓六十六錢といふ歳費の片割れがお目通りに及んだ、細君宛然死んだ子が蘇生つたやうに喜んだのも束の間、すぐ右から左とフイになつて了つた、細君つくづくと嘆じて、

『矢張手塩にかけて育て上げた兒でないと駄目ですね。』

▣喜劇　珍　强　盗

時……現代

場處……本郷

登場人物

書生……山中

刑事巡査……某

巡　査……某

幕開く、時間は一時過ぎ、寢靜つた森川町の裏通り、蕭々降りの泥濘に、街燈が淋しく映つてゐる。

『今夜も亦非常線警戒か、稼業とは言ひながら何日も有難くない役廻りを背負される哩。』と呟きながら、寒むさうに揚幕から出て來たのは刑事巡査の某、花道の七三に立止つて、舞臺の方を透し見たが

『こんな處に濡れながら立つてゐるのも智慧がない、彼處の軒下へでも入つてゐやう。』と舞臺正面の洋館造り、何々通信學校の看板が出てゐる軒下の階段に上つて、

『どれ此處で張つてゐやうか。』と後の扉に寄懸ると、音もなくすつと開いたので、危なく倒れさうになる足許を漸く踏堪へて、

『おや、今時分扉が開いてゐるとは……』の思入よろしくあつて、

屹と奥の方を覗いて見たが、

『さては……』と頷いて身拵へ、拔足して扉の中に入て了ふ。

舞臺半廻し、書生山中の宿直部屋、高鼾で寢てゐる山中は、蒲團の外に轉がり出て、大の字形に踏反り返つた足を扉の内側に突張つてゐる。

四邊の樣子を覗ひ〳〵密つと忍び込んで來た刑事は、適つ切此部屋が怪しいと言ふ見得で、素早く袂から捕繩を執出し、いざと言は

ゞの身構へ、

『こら明けんか、明けんか』と激しく叩音する。けれど寢入端の山中は一向御存知なく相不變の高鼾、少し焦慮込んだ刑事が片手でぐいと扉を押したが、山中の足が閊へてゐるので却々開きさうにもない。

『こら明けんか。』と力一杯押して見ると少し計りは明きもしたが、山中が足を延ばすと、又すつと閉つて了ふ、益々迂散に思つた刑事は、中で曲者が扉を押へてゐると感違ひ、もし飛込んで怪我でもしたらの不安から、割れるやうに扉を叩いて

『こら明けんか、俺りや刑事だ。』

道寝坊の山中も此音に吃驚して我破と起上つたが、
『慥か戸締りした筈なのに、何處からか忍び込んで來た處を見るとこりや強盗！』と思違ひして、性來の臆病、急にガタ〳〵胴顫ひして來た。
『けゝ刑事なんて其手は喰はないぞ。』と此扉一重が生死の境と一生懸命内から押へてゐる。
『さてこそ曲者！』と刑事は益々〳〵焦立つて
『どうしても明けぬな、よし叩き破つても捕縛つてくれる。』
『叩き破られて堪るものか、おい〳〵誰か助けて呉れい、強盗だ〳〵！』

『此奴言はして置けば儞の事を棚に上やがつて、誰か手傳ひに來い此部屋に泥棒がゐるぞ。』
『其手は喰はないぞ、迂濶に油斷して開けやうものなら、バサリと殺れる。桑原々々、人殺しだ助けてくれい。』
『誰か起きて來ないか、泥棒が這入つたぞ。』
『強盗だ〳〵』
『泥棒だ〳〵』
扉一つ隔てゝお互に怒鳴り喚いてゐたが、職業柄何時迄も斯うしてゐて、室中の曲者を取逃しては一大事と、
『よしつ、抵抗するなら抵抗して見ろ、打つた斬つてくれるから…

……』

『わつ、助けてくれ。』

『まだ開けないか。』と滿身の力を籠めて押し開けやうとする、顫へながら一生懸命に押へてゐた山中は、生きた心地もない。開けられたが最後と窮鼠の機轉、後向になつて、確乎と足で扉を踏張りながら、身體を延ばして反對の側の硝子窓を明けるや否や夢中になつて飛出さうとする。

押す力に扉と共に轉り込んだ刑事、斯くと見るより

『己れ逃してなるものか。』と山中の片袖掴んだが、

『掴まつて堪るものか。』と振千切つて、硝子窓から飛下りて逃出し

て了つた。

手に殘つた片袖を忌々しさうに叩き付け、

『糞つ、逃すものか。』と刑事も次いで硝子窓から飛下りて山中の跡を追蒐ける。

强盜、泥棒の聲に夢を破ぶられた家の者達は、摺枯木を持ち出したり、箒を擔ぎ出したり、寢惚眼を擦り〳〵周章狼狽の滑稽、よろしく〳〵あつて道具廻る。

寢靜つた本郷大通りの場面、一高前の派出所の赤い電燈の下には巡査が寢むさうに突立つてゐる。

『强盜だ、人殺しだ助けてくれい。』

『泥棒だ、誰か摑まへてくれつ。』との聲がけたゝましく眞夜中に響亘つた。

『おやつ。』と耳を欹て花道の方を透して見てゐると、

『强盜だ〳〵、助けてくれつ。』とばた〳〵花道から跣足の儘、片袖の千切れた寢衣姿で、氣息息き切つて、逃出してくる後から、

『其奴は泥棒だ、おい摑へてくれつ』と喘ぎ〳〵追蒐けてくる刑事

『こら待てつ。』と聲は掛けたが、何方が何方だか薩張理由が判らないので間誤付く巡査の姿を見るより、矢庭に縋付いた山中、

『ややつと安心した、どうか助けて、あれ〳〵後から强盜が……』

『摑へてくれたか有難い、散々骨を折らせやがつた。』と吻と一息する二人を怪訝さうに見比べて、

『おい〳〵、こりや何方が泥棒なのぢや。』

――幕――

▣臭い驟雨

駄洒落を以て天下に聞えた某博士、或る日何處かで强たか聞召した醉顏を、冷たい夜風に吹かせながら、好い心地になつて、ぶらり〳〵と醉步を運んで來る途中、急に小用を催したくなつたので、そつと四邊を見廻すと、寢靜つた夜の街は、誰一人々通りのないのを幸ひ、洋袴の釦を押外すや否や、逸り切つた噴水は、板屋打つ驟雨の勢を以て、とある板塀にジャアと計り注ぎ懸けると、これはし

たり、突如板塀の中に聲あつて、

『こらつ、何を莫迦な眞似する、さあ勘辨出來ねへ、どうするか見やがれ。』と矢庭に板塀を打つ倒して中から現れ出た大の壯漢、これはと計り延びた筒先も收縮して、ぼかんと醉眼を睜つて呆氣に取られてゐる鼻つ先、

『やい儞だな、仕事場へジャア〳〵垂れ込んだのは？……』と凄い權幕で怒鳴立てられて、漸やく氣が着くと、板塀と見たは下駄の齒入屋が表に立かけてあつた板で、其處へ遠慮なしに喞筒の筒先を向けたのだから堪らない、隙間洩れる潮飛沫は、夜仕事してゐる鼻先へ生溫い異臭を漂はせたので、これぢや怒るのも無理はない。

『いや、こりや何んとも申譯なかつた、つひ見違いたものだから……』の辯疏を肯かばこそ、

『見違ひたも糞もあるものか、人の家へ小便を垂れ流しやがつて、只申譯ねへで濟むと思ふか唐變木ッ。』

遁の博士も此時には得意の駄洒落も出なかつた、百方陳謝して、

『實は醉つた揚句、眞逆此中で君が仕事をしてゐるとは夢にも知らなかつたもんだから、彈み切つた勢ひで、遂ジャア〳〵やらかした始末、怒るのも無理はないが、知らずにやつた事だ、腹も立たうが了簡して貰ひたい。』と今更悴に叱言を云ふ譯にも行かず、小さくなつて洋袴の中に縮まつてゐる息子に代つて、博士とあらう身分

が、下駄の歯入屋に低頭平身、

『仕方がねへ、飛んだ災難だと思つて我慢してやらう、だがいくら喰ひ醉つても將來もある事だ、少つとは氣を付けるがいゝぜ。』と漸やく機嫌直して、ぢろり博士の上から下迄見下しながら、

『おい素敵だなア、あれぢや消火栓の代りになるぜ。』には消火いとの洒落も言へず尻尾にあらぬ洋袴の釦を押へて、恐入つて了つたさうだ。

▣猫泥珍話

『妙音天女の春の雪、めぐらす袖に讃佛乘の因を示し、觀音菩薩の

秋の日は、指す手招牌猫の縁を傳ふ、虎は死して皮をとゞむるに過ぎざれど、猫は皮を止めてまた妙音を發す……』と饗庭篁村翁が猫塚勸進帳の名文句にある通り、潰島田の藝妓が床しい音締めの犧牲となるニャン公の皮は東京丈けでも年に一萬枚以上、次ぎは大阪、名古屋と、木天蓼の香ならぬ、白粉の匂の浮く場所柄の順によつて莫大の需要がある、それで此供給はと言ふと、未だ曾て日本に猫の飼育場がある話を聞いた事もないから、言はずと知れた猫釣り即ち猫泥の手によつて供給されてゐるとはニャンと驚くではないか、

三味線製造者に言はせると

「どうも野良猫などでは、平素引つ掻き合つてゐたりするとで、肝腎の皮に傷痕があつて、迚も上等物にはなりません、どうしてもお妾や御隠居さん達や、玉や〳〵と懐中に入れて我子のやうに、後生大事と育てた者に限ります。』と、だから隨つて此後生大事に育てられた猫の皮が上値に賣れる、猫釣の目差す處即ちこれにありだ。

したが何しろ對手が素早しつこいニヤン的だから、おいそれと容易く失敬する譯には行かない、少なくも半歳以上充分の熟練を積まなければ一人前の猫泥たる資格は得られないさうである。

先づ第一市内各區各町の地理を精査して置かなければならぬ、つ

まり路次、抜け裏などに通暁してゐないと、仕事が仕事で人目を忍んでチヨロマ化する冒險事業なので、もし他人に發見つた場合、忽ち姿を瞞まして了ふ準備研究が要る。

其次は目的物の居る家か居ない家かをよく見判ける事が必要である。さて愈々目指す猫を失敬するにしても、生れてから一年以上經過したものは、皮の價格も安いし、それに敏捷で、却々手に負へないが、まだ生れて六七ケ月位の猫は、皮の價もいゝし比較的人馴つこいから勞せずして一擧兩得と言ふ譯である。

兎に角覗つた猫をギユッと捻つてすぐに小脇に挾むのには、どうしてもインバネスを着る必要がある、一名猫隠し、ニヤンバネスの

語原が起つたかどうかはよく知らない。

猫泥の説明は此位にして擱いて、茲に面白い猫泥失敗譚を紹介する。

淺草の辰公と言ふ猫釣博士ニヤン泥教授が、例の通り一稼ぎに、豫ねて目星を付いて置いた圍者らしい家の軒下に忍んで、用意の油で揚げた鳥肉の小片をそつと窓下に載せて置いて、誘ひを懸けると哀れや己が生命を覗ふ曲者ありとは夢にも知らない猫先生、プンとくる堪らない香氣に釣られてゴロ〳〵咽喉を鳴らしながら、窓の上に飛上つて來る、

『〆めた』と計り其機會を外さず餌を手許に引くと、ニヤン公すつ

かり物魅されて、夢中で餌を追つて窓から飛下る。それを段々釣寄せて、遂には膝の上迄乘つてくる、得たり賢こしで、徐ろに喉を撫でゝやりながら、不意にギユツと掴んでニヤンなく締殺して了つた迄は手馴の上出來であつたが……、

『あれいつ、誰か來て……』と突如悲鳴一聲！

『しまつた。』と計り逸足出して逃げんとする間もあらせず、格子戸の中から礫のやうに飛出した髪も帶もしどろもどろに振亂した女、

『助けて……』と矢庭に辰公に抱付いた。

『南無三寶惡事露顯！』と力任せに其女を突倒して逃げやうとしたが、ニヤンバネスの羽に縋つて放さばこそ、

『助けて……助けて……』と顏色變へて氣息も切々、

『お内儀さん、何も惡氣でやつた譯ではないのだ、後生だから、大目に見逃して貰ひたい。』

警察へでも突出されては萬事休す、惡氣でないもよく出來た苦しい辯疏、押倒して其隙に、振拂つて跡を霞と消えやうとしたが、物凄いやうに屹相變へた女の一心は、摑んだ指先に盤石の力が籠つて羅生門の鬼女ならぬ腕が抜けても放しさうもない、辰公今や氣が氣でない、もし愚圖々々してゐて、又もや誰にか飛出されてはそれこそ臭い飯を喰はなければならない羽目、

『ご後生だから放して下さい、どんなお詫でもしますから……』と

哀訴嘆願も物狂はしい女の耳には入らばこそで、

『助けて……助げて……』と齒嚙付いてくる、

『こん畜生其處にゐやがつたか、唯置くものか、叩つ殺してくれる。』と眞實打殺しも仕兼ね間敷き權幕で出刄庖丁逆手に女の跡から追つて出た男、絶體絶命、今はこれ迄と、折角の獲物を其男の顏に叩付け、

『これは……』と不意に驚く其隙に、拐ぎ取るやうに女の手を振離して、無我夢中一目散！

『あんな恐しかつた事はありませんでしたが、後でそれとなく樣子を聞くと、何んの事莫迦々々しいぢやありませんか、私がドヂを

ふんで發見かつた譯ではなく、其處の家で夫婦喧嘩をして、お定りの斬る殺すのと嚇しの出刄庖丁、助けて〳〵と女房さんが私の身體に齒嚙付いたのも、殺した猫を助けてくれろと言つたんぢやないんで……處が脛に傷持つ私は、適つ切さうと計り思つたもんですから、折角手に入れた猫を到頭フイにして生命空々逃出した間の惡るさ、自分ながら莫迦々々しさに呆れちやいましたよ、けれど私のお蔭で、目の前に猫の屍骸が降つて來たので、先方でも度膽を拔かれて了つて夫婦喧嘩はおぢやん、今でも屹度仲よく暮らしてゐるでせう、あはゝ猫泥も飛んだ功德になつたものでげさ。』と辰公自身が苦笑しながら物語つてゐた。

▣桝飲將軍

陸軍省内で有名な酒豪島川技術審査部長、恬淡磊落毫末も邊幅を飾らない。毎日退省の途中電車内では據なしに諦めもするが、足一歩車臺から飛出すと、もう腹の虫が雨蛙のやうに酒の雨を浴びたがつてキウ〳〵鳴出す始末、迚も自宅の門を潜る迄の辛抱が成兼ねるので、先づ出入の酒屋を襲擊して、枡の隅から喝いと一息に飲干して、

『どうやらこれで腹の虫が納まつた哩。』

運惡く此兜の眞最中、友人や部下の者に遭遇すと、

『やあ。』と右の手の桝は口から離れないで、左の手で形式計りの答禮。

或る日急に激烈な腹痛を催したので、居ても立つても我慢が出來ず、俥を走らして豫て懇意な大久保邊の醫者の許へ診察を乞ひに出蒐けた、すると其醫者先生大分流行ると見えて、門前市を成す程の患者や藥取、

『只ぽつねんと玄關先に待つてゐられるもんぢやない。』とあつて、幸ひ腹痛も先刻より餘程薄らいだので、程遠からぬ親戚の許を訪づれると、何がさて評判の酒豪だから、お茶の代りに燒海苔か何かで早速一本附けてくれた。

『これは御馳走！』と馳付三杯を重ねて、段々德利の數を並べてゐる中不思議やさしも腹痛、酒の香が腹中に泌み亘ると、忘れたやうに癒つて了つた。

『これある哉』と額を叩いた將軍、

『君からあの藪醫者に敎へてやつてくれ給へ、平凡な藥を盛るよりは、此米の水が方が餘つ程よく利くつてな。』と。

それ迄はよかつたが・何處をどうして嗅出したか、それが數日過ぎて、國民新聞の閑休子の好材料となつた。併し御本人の將軍、一向御存知なく平氣な顏で登省するのを、課の部下連中、將軍の顏を覗いては頻りにクスリ／＼笑つてゐる。

『おい君達は何がそんなに可笑しいのか。』と訊いて見ると、
『ではまだ今朝の新聞を御覧にならないのですか。』
『新聞なんか見てゐる暇があれば、冷酒でも喝と引つかぶるよ。』
『あはゝ、成程々々、桝の隅からの兜は隨分振つてゐますな。』と新聞を執つて指示したは前述の記事、將軍毫末も氣に留めず、
『世の中には餘つ程暇人がある、他人が酒を飲むのに苦勞するなんて愚の骨頂だ、そんな暇に一杯でも餘計自分が飲んだらよさうなものぢや。』と頗る納まつたものだが、生憎と納らぬのは其日歸宅してからの事、令夫人から改めての宣告が下つた。
『貴郎、後生ですから桝酒丈けは止して下さい、御酒はいくら召上

つても宜しうございますが、酒屋の店頭で立飲なんかなさると、さも〳〵家で充分御酒を差上げないやうに思はれて、私が困ります。』
遉がの將軍も此一大痛棒には一言の言譯もなく恐入つたが、小癪に障るのは、此事を新聞記者なんかに告口した奴、
『屹度あの籔醫者に相違ない。』と睨まれてゐるとは露知らず或る日の事、往診歸りに俥を急がせて、將軍の邸前を通ると、折柄令孃を抱いて門前に立つてゐた將軍、車上で恭しく一揖するのをヂロリと見上げながら、突如大喝一聲、
『莫迦つ。』

▣恨みの猿股

筆では如何にも通人振つて、粋も甘まいも嚙分けてゐるやうではあるが、其實文士連中の多くは大抵野暮天の寄集りで、見渡した處どれもこれも藝者からチヤホヤされる資格を具へた者のないのが不思議である。都々逸一つ滿足に唸る事も出來ない手合で、刹那の歡樂は畢竟汚ない文字を綺麗に直した丈けだとは恐入つて口も利けない始末、其數には洩ない去る文士とのみでは分かるまいが、情話文學で賣出した御酒人とか仰しやる御人。

淺酌低唱の甘たるい情緒を味はふやうな面倒は一切略いて、僞

らざる告白を以て特別に口說立て見ると、案ずるより産が易いの譬の通り、

『文士と言ふのも一寸味が變つて面白からう。』位の好奇から、二つ返事で待合行が纏つた嬉しさ、新聞の懸賞小說に當選した程の喜びで、早速對手の藝者を伴つて、首尾よく待合の四疊半にデレリと納つた迄は上出來であつたが、梢迄來てゐる秋の暑さから、

『丁度お風呂が湧いてゐますから、一汗お流しになつて御緩り……』

と氣を利かせた女中の接待、

『それぢや一風呂浴びて來やうか。』と女中の案内で浴衣と着替へて湯殿へ出蒐けた留守、其處は女、汗染んだ男の衣類を衣桁に懸けて

置かうと、何氣なく脱捨てある衣類を手に執ると其下から飛出した代物、男の大切な箇處を藏ひ込む猿股と名づくるもの、

『おやつ。』と眉を顰めたのも道理、文士ともあらうものが、白が鼠に染つて、處々穴が明いてゐるとは、いくら夏向でも恐縮する計りか、地圖のやうな。ソースの浸染に、カレー粉まで點々と印してゐる有樣は、差詰お手前ものゝ筆の先にもどう言ふ形容詞を用いてよいやら、汚なさ臭さに思案の小首を傾ける前に、鼻を抓んで逃出さなければならぬ有難さ、いくら他人に見せない處でも、これでは餘りにお粗末過ぎる。

『文士なんか言ふ者は、みんなこんなに汚ない臭いものかしら、これなら葛西の脊兄の方が餘つ程氣が利いてゐる。』とすつかり嫌氣がさして了ひ、

『あゝ道理で昨夜の夢見が惡るかつた、便所へ片足踏外したのは正夢で、屹度今日のお告に違ひない、もう少して身體迄此臭氣に染上る處たつた、物騒々々。』と計り、早速歸支度して、急に持病の癪が生つたからとか何んとか出放題の口實で、女中の止めるのを振切るやうにして、風呂から上がらぬ中にと、大急ぎと戸外へ飛出し一目散に家へ逃歸つて、下駄を脱ぐより早く臺所で手の鹽磨き、

『早く香水を持つてお出で、お線香をお建て。』理由を知らぬお三面喰つて、

『姐へさん、汚穢屋でも來たのですか。』

話變つて、此方は當の文士、天下の色男乃公一人と納まり返つて特別念入に石鹸の泡を浮かして、面の皮の剝ける程磨立て、

『さあこれからが本舞臺！』と花道ならぬ楷子段の七三でニッタリした思入よろしくあつて襖をガラリと明けて見ると、目的は何處かへ雲隱に、眞逆座敷にスッポンがある譯でもあるまいがと女中に訊いて見ると云々の言托、何んだか狐に魅まれたやうで、腹は立てども怒られもせず、

『今に癒つたら來るだらう！』と愛想盡しの種とは夢にも知らぬ猿股の紐を締直してポッネンと待つてゐたが音沙汰があらばこそ、我

慢が仕切れなくなつたので、自身電話口に出て、

『どうだもう癪は納つたか。』と謀叛氣隱した親切氣を見せて訊ねて見ると執次の雛妓、

『姐へさんは途中で犬の糞でも踏付けたと見えて臭い〳〵つて大騒してゐますよ。』

▣男の奥さん

前衆議院議長

『御異議ございましよまいな。』で有名な奥ベーロシャ君の宅を訪問する者は屹度玄關口で間誤付くのが例になつてゐる。と言ふのは、

『御主人に御面會を……』とやれば何んの事もないが、大抵は、
『奥さんに御面會を……』とやるので取次の書生から、
『奥さんですか、先生ですか。』と訊き返される。
『奥さんです、先生です。』と鵜返しにやると、もう一度念の爲とあつて、
『男の奥さんですな。』と駄目を押す、何故こんな反問をするかと云ふのに、時々夫人の許へも、
『先生に……』と言つて面會に來る女客があるので、男の奥さん女の奥さんと奇拔な區別を立てるやうになつたとの事である。

▣金箔演說

先年田中銀行の頭取田中武兵衛君の孫娘の結婚披露の席上、來賓總代として祝辭を述べた前參政官町田良治君、
『能辯は銀也、沈默は金也、此樣な席上は金の方がよい。』と冒頭したので、列座其頓智の警句に感心してゐると、先生何時しか油が乘つて、折角の警句も忘れて了ひ、東京辯秋田辯混合で、約一時間のダラ〳〵演說！
『金にしては非道く長過ぎる。』と席の一人が欠伸交りに溢し立てると、又一人が、

『何あれはね、屹度箔に延ばしたのだらうよ。』

▣それは逆様

小笠原長幹伯が彫型の技は、毎年の文展出品で人も知つてゐるが何時も其摸型には水入らずの令夫人貞子の方が立たれるのである。而も伯の餘技は、更に油繪にも及んで、此頃毎日のやうに繪の具を塗たくつては、訪問客の批評を求める、其油繪たるや彫型の技倆とは格段の相違、アカデミツクや印象派の古い頭脳では一寸判斷の仕様もない珍なものでピカツソの三角畫や、未來派の立體畫糞喰への出來榮え。

『油繪と言ふものは妙なものですな。此何んだか判らない處が價値なのですか、何んです、向ふの鶯餅見たいなものは？』

『莫迦言つちやいけない、ありや山だよ。』

『はゝあ山ですか、さうして此方のおでん見たいなものは？』

『こりや樹木さ。』

『へえ、おや〳〵蒸し立てたと見えてぽつぽと煙が出てゐますね。』

『冗談ぢやない、ありや雲さ。』と畫をかくより此説明の方が餘つ程骨が折れる、

或る人が例の如く伯が自慢さうに持出して來た一枚を手に執つて『成程、これは面白い。』と仕様事なしのお世辭を並べると、伯は怪

訝な顔をして、

『おい〳〵君、それぢや繪が逆樣ぢやないか。』

『あつさうでしたね。けれど此繪は逆樣の方がようございますね。』

には遉の伯も二言なしの體で、

『ぢやあ裏返して見ると、餘計いゝかも知れない。』

▣白紙の方が價値

此前の總選擧の時東京府下から候補者の名乘を揚げて出た本田貞介君を應援に出蒐けた柳原義光伯の巖谷小波の小父さんが宿屋に着くと、土地の有志連中、ゾロ〳〵押蒐けて來て、

『どうぞこれに御染筆を……』と矢鱈絹地や畫箋紙を擔込む。處が以前書畫の揮毫で、飛んでもない選擧違反の嫌疑を受け、怖い恐ろしい閻魔の廳へ引つ張出された例もあると聞いてゐたので、一應念の爲と警察へ問合せて見ると、其返事が頗る振つてゐる。

『巖谷さんのは價値があるから危ぶないけれど、柳原伯のは差支あるまいと思ひます。』

此侮辱を受けた伯、業を沸すまい事か、

『よし〳〵さう言ふ事なら根限り腕の折れる迄書なぐつてやる。さあ屏風でも襖でも擔込んで來い。』と計り、腕に撚をかけ、墨の磨る間も面倒なと、勿驚一時間二百餘枚、傍人曰く

『成程、官許の賣藥は有難味が薄いね。』

▣飛んだ臍泥棒

『桑原々々！』と篠つく如き驟雨にぐつしより濡れた單衣を絞りながら、目に灼金をあてるやうな電光と、耳にはためく雷鳴に、ぶる〳〵顫へながら、とある軒下に小さくなつてゐた男。地震も左迄は驚かず、火事にはアリヤ〳〵と飛出して、他人の家の燒けるのを風上から面白さうに眺める度胸もあり、親爺は火消壺に叩込んで蓋をする圖々しさも持ちながら、どうした事か性後の雷嫌ひ、驟雨を誘ふ黑雲が空に現はれると早や寒氣を催し、ピカッ、と光ると悸つ

と身の毛が悚立ち、ゴロッと鳴と耳を押へて顏色が蒼白になる金箔付、此子胎内にある時、母親が雷に臍を取られた夢を見た故でもあらうか、これ丈けは他人に何んと言はれようと、療治の仕樣もない。

此日も用達に出た歸途、終電間際にピカゴロに遇つたのだから堪らない、電車の中でも睾丸は上つたり下つたり、電車を降りるや否や、下駄を手に提げて一目散、

『此奴一つ嚇かしてやれ。』とでも思つたのか、惡戲好の雷公、面白がつて頭の上でゴロピカやるので、其度びに、

『桑原々々！』の百萬遍、雷鳴益々烈しくなるので、もう家迄の我

慢が出來ず、濡鼠で馳込んだ軒下、

『惡戯序にもう一つ度胸を拔いてやれ。』と氣紛れの雷公、ピカッと凄じい照光燈を目の前に浴せかけて

『ウワッ。』と叫ぶ間もあらせず、

頭上からグワラ〳〵ズドンと四十二珊の巨砲を放つて、目標は小半町とない榎の大樹、バリ〳〵と黑雲踏拔いて落來つたから堪らない。

『キャッ。』と耳を押へて無我夢中、矢庭に見ず知らずの家の雨戸を叩き外し、格子戸を蹴破るやうに、下駄を提げた土足の儘馳上つたさうとは知らぬ其處の若夫婦、喃々と睦言にも飽きて、華胥の國へ

新婚旅行の眞最中、雷の落ちた音と、雨戸蹴破られた物音に、蚊帳の夢を破られて、

『おやつ。』と見上げる蚊帳の外には、濡鼠になつた大の男が、手に持つ兇器は眞逆に下駄と氣の付く由もない、早合點に强盜と思込んで、

『どゞうか、生命計りはお助け……！。』

『そりや此方で言ふ事、後生ですから蚊帳の內へ入れて下さい！』

腹は立てども怒られもせぬ同情心、雷のはためきが遠ざかつてから、漸やゝ人心地の付いた俄强盜の平身低頭に、樣子を聞いてこれも一安心した若夫婦、仕樣事なしの苦笑ひ、

『そりやお氣の毒でしたな、けれど私達もお蔭で壽命が百年も縮りました。』

此事を後で聞いた其男の友人の言草がいゝ、

『君、先方が女一人であつたら、餘計驚いたらう！』

▣ 黑枠の結婚披露狀

『變り者！』で通つてゐる男、良緣あつて新婦を娶る事となつが、普通平凡な披露狀では面白くないと、珍趣向に頭を痛めた揚句、死生一如の禪味を發揮して、左記の如き珍妙奇扳の葉書を振撒いて友人達を『あつ』と言はせた。

……儀豫て……と婚約中の處來る○日午後○時日比谷太神宮に於て結婚式擧行候條此段辱知諸君に謹告仕り候

追而當人の意志により御祝ひ物の御寄贈は堅く御斷り申上候

大正　年　月　日

其翌年月滿て男子分娩の披露狀が又振つてゐる。曰く、

期待の結果か、偶然の結果か、昨夜荊妻男子分娩仕り候。

物價暴騰の今日、告白すれば父となる喜びよりは、今暫く母體に殘留申付度候ひき、先は右御披露迄　匆々

帽子强盜

『高木兼寛博士が、急に發狂しましたから大急ぎで來て貰ひたい。』と思ひも寄らぬ電話が、先年芝の慈惠病院から、駿河臺の金杉博士の許に懸つて來た。

眞逆あの老いて益々盛んな先生が、發狂しようとは夢にも思はなかつた。こりやア捨て置かれない。』とあつて、日頃から懇意な金杉君が、大急ぎで自動車を飛ばして馳付けて見ると、當の御當人たる兼寛博士、平常と何んの變りもない態度で、

『やあ、何か急用でもあつて來たのかい？』

狐に魅まれたやうな金杉君、それでもと言ふ不安から、二言三言話合ひながら、怪訝な顏で兼寛博士の樣子に目を留てゐたが、毫末も氣狂らしい態度はない。

『おい嚇かしちやいけないせ、僕は今君が氣狂になつたと言ふ急報に接したから、忙てゝ飛んで來たのだ。』と打明けると、

『莫迦言つちや困るよ、間違ひにも程がある。氣狂ひ扱ひにされて堪るものか。』と大笑ひで濟んだが、一體どうした間違ひかとよく〳〵調べて見ると、兼寛博士天性の持論たる無帽主義を時局と共に勵行しようとでも思つたのか、慈惠醫學校の表門に佇んで、門內から出てくる生徒の帽子を、片つ端から引つ奪つて了つたので、學生

も事務員も吃驚仰天、さてこそ如上の電話を金杉博士の許へ懸けてあつた。

▣發狂太夫

氣狂扱ひと言へば、先年物故した貝島太助翁が、或る時商用で上海へ航海の船中、不意に其姿が見えなくなつたので、隨行の誰彼が心配して、船中隈なく探して歩くと、月光燦たる上甲板で、大勢の西洋人が、頻りに指し合つて立騒いでゐる樣子、何んの椿事かと覗いて見ると、衆人環視の中央にどつかと浴衣一枚で座り込んでゐるのは、今が今迄探し廻つてゐた太助翁！

『ありや屹度何か悲觀の極發狂したのでせうよ』など、外人が囁合つてゐたのも道理、太助翁大の淨瑠璃狂ひ、今宵上甲板に月光を浴びながら涼んでゐる中、遂持病の遠吠、最初は小聲でやつてゐたが、興益々湧いて、今は一生懸命、夢中になつて唸り始めた。さりとは知らぬ外人、大聲擧げて泣いて見たり笑つて見たりしてゐる樣子が、どうしても氣狂ひとしか他人目には見られないので、

『さてはあの日本人は發狂したのだ』と衆論一決。

『あの年になつて可愛想な者ですな』と飛んだ同情、隨行の者達も呆れ返つて、

『もし〳〵人集りがして見つともありませんから、船室へ戻りませ

う！』と手を挑つて引立てやうとしたが、翁は頑として動かない。

『大分此船には淨瑠璃の判る外人がゐて、先刻から俺の語つてゐる節廻しに感心して聞いてゐる。序だからもう二三段聞かしてやらう。』

▣殿閣下

先年矢鱈に署名の下に譯の分らぬ花押を入れる事が流行つた時、人の惡い花井卓藏博士、

『よし〳〵乃公のは一つ奇拔なのを發明してやらう……！』と沈思默考、稍あつて丁と小膝を打ち、

『これに限る。』と頻りに北叟笑しながら、何が何んたか薩張會體の知れぬ格好をくる〳〵と捻くり廻して、

『どうだい、花押だらう！』と以來盛んにそれを用ひてゐた。

其花押たるや、花井の花の字でもなく、卓藏の卓の字を崩したのでもなく、實を言ふと殿の字を筆に任せて、デッチ上げたので、つまり自分で『花井卓藏殿』の敬稱を用ひて、納つてゐたのである。

『これ計りは誰も氣が付くまい。』と衆愚を嘲弄してゐたが、更に上越す豪の者は、矢張惡戯仲間の齋藤二郎君、何時か此『花井卓藏殿』を看破して了つて、

『あはゝ、よしつ此方も一工夫してやるぞ。』と計り、盛んに紙上へ

墨蛇蜿々とやつてゐたが、

『これなら大丈夫、手品の種は判るまい。』と早速花井博士にそれを示して、

『花井君、君の花押も奇拔だが、僕のは更に奇拔だらう！』

何ぞ圖らん、印ちこれ『齋藤二郎閣下』と蜿くらしたのであつたとは、道の博士も氣が付かず、

『奇拔たか何んたか知らんが、莫迦に手に込んだ花押だね』

▣ 龜の子踊

美術學校教授結城素明畫伯が、まだ今の盛名を贏ち得ない時分の

事『十二階裏』と言ふ題材で精々艶ぽい處を描寫て見ようとでもの謀反を起したのか、朝日新聞の名取春僊君と一緒に、千束町へモデルの選擇に出蒐けた。

『何女も此女も、莫迦に腰部が發達し過ぎてゐるな。』と酒機嫌の千鳥足で、あの狹い道の兩側を片つ端から審査を下してゐたが、ふと或る一軒の窓先を覗込んだ素明君、室内にどんな氣に入つたモデルがゐたのか、春僊君がいくら呼んでも動きさうにもしない。

『おい〳〵どうしたのだ、そんな處へ御神輿を据えるのは餘んまり圖がよくないよ。』と聲を蒐けて見たが、御當人の素明君、窓の竹格子に捉つたなり、

『ウン〳〵。』と唸つてゞざる。室内のモデル連中、何が可笑しいのか、頻りに

『キヤッ〳〵。』と笑ひ轉げてゐる樣子、

『おい、莫迦に感服してゐるぢやないか、素敵な尤物でもゐたのかい。』と立戻つた春僊君が、窓先に來て素明君の肩を叩くと、

『ホ君、これをどうかしてくれ給へ。』と援助を求める體態が、どうやらモデルに感服して嘆賞の辭を放つてゐる風でもないので、どうした事かとよく〳〵見ると、これはしたり、窓の中を覗込む拍子に勢餘つて首を竹格子に突込んで了ひ、押せども引けども抜ければこそ、宛然緣日の亀の子同然、手足をバタ〳〵やつて藻掻いてゐる

格好、同社の三平君でも煩はして漫畫の材料にしたら至極面白からうの有樣、

『ちよつと御覽よ、あの格好たらないね、もし〳〵ハイカラの旦那氣息次ぎに上茶でも召上れ、お煙草でも付けませうか。』

『ほんとに江川の玉乘だつてこんな珍らしい藝當は見られないわね千番に一番の兼合ひ、仕損じは幾重にも御容赦、太夫お目通り迄控へさせます。お挨拶濟しますれば愈々本藝に取懸せます、さあ亀の子踊の始り〳〵。』

『今度は私が口上を言はうかね、エーこれに調製らへました人形はハイカラ出歯亀窓覗きの光景、作人の儀は山本福松、眼中の働き

から、手足の工合に至るまでお目止めて御一覧！さあ評判々々。』

口の悪い千束町の阿婆摺共、

『キャッ〳〵。』と笑ひながら指さし合つて、嘲罵の唾を浴せ蒐ける。

『此畜生、巫山戯るな。』と腹立紛れ力任せに引拔かうとしたが、

『あ痛い、おい名取君、後生だから何んとかして貰ひたい。』

眞つ赤にいきんで藻掻く格好が、益々以て珍妙不思議に、阿婆摺連は手を打つて面白がる。

『出齒亀人形早變り、金時の火事見舞、煙に捲かれた泣つ面とござい。』

『言はして置けば此奴等、エ、糞忌々しい。』と春僊君と二人懸り、竹格子を力一杯引張ると、ミチ〳〵と音を立て拷り折つて了つた。

漸くぽつくりと首は拔けて、怪我もなく無罪放免自由の身となつたはいゝが、納らぬは竹窓の始末、

『やいつ、他人の家の窓をこんなにしやがつて、濟まして歸へる積りか。』と飛出して來て、矢庭に素明君の襟首掴んで引戻したのは此家の御亭、商賣柄、肌を脱げば倶利迦羅紋々でも彫つてゐさうな破落戸、

『以前通りにして置きやがれつ。』

四の五の言はゞ、拳螺のやうな拳固が、雨と降らなん凄じい權幕

に、一難免れて又一難、

『おい名取君助けてくれつ。』

結局此始末は、

『様子のいゝ生人形の旦那！。』と崇められて、金が口利く高い散財をさせられて鼻はついたが、殘る恨みは腹下しになつた財布の底。

『高いモデル代になつて了つたなア。』

物騒な番號

『名は體を現はすと言ふ譬もあるが、自動車の番號が亦頗る名詮自稱だから面白い。』と兎耳子連が集まつて、政界の風雲低氣壓の豫

報を待合せてゐた記者室で、誰やらが言出した。

『はてね、そりや一體何んの意味なのだ？』と一人が訊く。

『他でもないが、今日虎の門で出遇つたのは例の區裁判所行の監獄自動車さ、何心なく後の番號を讀むと六五九としてある。成程監獄丈にむごくは振つてゐるに感心して來たのさ。』

『さう〳〵六五四も矢張監獄自動車の番號にある。むごく、むごしなどは慥かに名詮自稱で、名實一致してゐるね。』と一人が合槌を打つた。

それから暫く自動車の番號話しに花が咲いた。

『此頃元老連の自動車が、よく人を轢くが、矢つ張爭へぬ車體番號

が奇妙だ。山縣公のは二六〇で踏むわ、松方侯のは一九〇で轢くわさ。』

『妙々、大隈侯のは一九でこれもひくか、けれど早稲田の親玉には二九〇で吹くわの方が適當してゐるね。あつはゝ。』

『處で未來の大元老を以て任じる後藤男爵のは特に恐しいよ、二三九だから踏み碎くと來てゐる。』

■後藤男の戒名

語は舊いが、故桂公のお通夜の晩、同邸の休憩室で顏を合せたのは、兒玉淳一郎、馬越恭夫、早川鐵治、後藤男の面々、談は故人生

前の逸話から、果ては死後の戒名に迄及んだ、すると誰やらが、

『どうです、序の事に後藤男のも今の中戒名を選定して置いたらいゝでせう。』と發議する。

『そりや面白からう！。』とあつて、早速一人が筆を執つて、紙片に書いて示したのは

『臺滿院殿鐵網利民居士』

『成程、臺滿の二字に一種の響きがあつて面白いが、鐵網利民は少々提灯臭いね、寧ろ煤煙捲民居士の方が男の性格を躍如たらしめるね。』と遠慮のない一人が笑ふ。

『よし來た、それぢやア僕が男の爲に、一つ奇拔な戒名を選定しや

う。』と一呵筆を走らせたのを見ると、

『大風院殿雲飛吹倒居士』

御當人の男爵、仕方なしの苦笑を洩らしながら、

『大風を起したり、煙に捲いたり、吹倒したり、宛然俺を忍術使にしてゐる。』

■一軒燒

一昨年の一月、帝國ホテルで開かれた聯合國慰問會の席上で、德川總裁以下のお歴々がずらりと顔を並べた處を、寫眞師が撮影しようと、マグネシームに點火した、するとすぐ其傍に蠅辷りの禿頭をテカ〳〵させてゐた某實業家、頭の上でパッとやられて思はず

『あつ大變！』と頭をかゝへて逃出さうとするのを、

『あはゝ。』と笑つた澁澤男、

『さう狼狽て逃出さなくつてもいゝぢやないか。君の頭には格別燃付くやうなものは生へてゐないよ。』と却々口が惡い。

■何方が主人？

中村進午博士は、其容貌が既に羅漢めいてゐる處へ、する事爲す事悉く此羅漢式を發揮する、床の置物から掛軸の類迄、佛畫佛像にあらずんば、これに因んだ物計り、殊に其應接室の如きは、印度

遲羅、西藏邊の佛像を、古道具屋の店頭のやうに列べて、博士が眞中に座つた鹽梅、とんと貧乏寺の和尚にしか見えない。或る訪問客後で人に語つて曰く、

『實際何方が羅漢だか、餘んまりよく似てゐるので、間誤付いて了ひますよ。』

▣婚禮に御出棺

有難からぬ世界感冒が、再度迄も來襲して、ゴホン〳〵と流行せた計りか、少し油斷すると、片つ端から死神に手渡して了ふ物騷さ病源菌の研究やら、傳染豫防の警告やらに頭を痛めてゐる、中には

火葬場が滿員客止の大景氣、三途の川を自動艇で渡して追付ず、目下鐵橋架設の計畫中であるかないかは、遺憾ながら便りはないが、歐洲の大戰亂が濟んで吻と一氣息付く間もなく、又ゾロ〳〵亡者共に押蒐けられて、地獄も極樂も大面喰ひに違ひない、地獄へ行く奴が極樂へ迷ひ込んだり、極樂行の者が地獄へ舞込んだり、

『込合ひますから御順にお詰を願ひます。』と脫衣婆さんや、牛頭馬頭が聲を嗄らして怒鳴立てる口の中へ、得たり賢しと病菌が飛込んでゴホン〳〵、

『俺達が死んだら、何處へ行かう？』

これぢやあまるで落し語だが、實際今度の世界感冒で、目の廻る

忙しさは火葬場である。夜計り燒いてゐたのでは、跡から〳〵と擔ぎ込まれる新來の死亡者が間に合はず、其筋の許可で點火の時間を延長して貰つたが、それでも中々追付ず、白木の棺が順番の來るのを待兼顏に、五十も百も並んでゐる始末、幾晩も徹夜を續けた隱坊が、眠い眼をこすり〳〵忙しさ紛れに番號を間違へて、隣りの火葬竈から、がら〳〵引出したの嬰兒の白骨、骨揚に來た者は呆れ返つて。

『おや〳〵、俺の親爺はこんなに頭が小さかつたか。』

悲劇から生じた喜劇はいくらもあつた。牛込に住んでゐた著者の知人は、娶つてまだ二月と經たない愛妻が、感冒から肺炎に變症し

て、醫藥其効を奏せずカンフルの注射も遂に絶望に歸して了つた。

『朝の紅顏空しく消へて、夕には唯白骨のみぞ殘れり、六親眷屬嘆き悲しむとも更に其甲斐あるべからず……』の讀經が身に泌みて涙を誘つた通夜の晩、或る親戚から、

『此頃火葬場は滿員續きで、餘つ程早くから申込んで置かないと應じてくれませんよ。』と注意を受けたので、直樣日暮里の火葬場へ電話をかけて見ると、

『何しろ百二三十も堆積つてゐるのですから、明朝早く持つて來て下さらないと、四五日は到底燒く事は出來ません。』とある。

『そりや大變！』ともう一晩通夜すべき筈を急に變更して、翌朝途

中行列扱きの葬儀馬車で繰込む事とした。

悲嘆の一夜を涙と共に明かした翌朝、あはれ共白髪の末迄もと契交した愛妻の遺骸を荼毘一片の煙となすべく柩を乗せた馬車が、雪解の途を日暮里へ急ぐ途中、

『おい、變だぜ。』と馬の轡を摑んで、馭者に囁いたのは馬丁であつた。

『變だつて……何が變なのだ？』

『まだ氣が付かないのか、俺が先刻から後に乘つてゐると、中の棺が妙にゴト〳〵音がするぜ。』

『莫迦言ふな、そりや氣の故さ、雪解の道路が惡いので、先刻から

船にでも乘つてゐるやうに搖られ通しだ、それで棺中の佛樣が動くのだらう。』

『いゝやそれ計りぢやない。』と言懸けた馬丁は急に耳を濟まして、

『そら、あの音が聞えないのか。』と言つた。

『こりや妙だ、斯うやつて馬を止めてゐるのに、棺の中で動いてゐる音がする。眞逆朝つぱらから幽靈が飛出す譯でもあるまい。』と車上の馭者も合點行かぬ顏付で、柩車の中を顧向きながら言つた。

『おいどうした、何んだつてこんな處へ停めて了つたのだ？』と續く馬車の馬丁や馭者が聲を蒐けた。

『どうも樣子が變なのだ。』

『何が變なのだ、馬懶け癖を出しやがつて動かなくなつたのか。』

『馬が動かないで心配するのぢやない、妙に棺がゴト〳〵音がするから薄氣味が惡いのだ。』

『えつ何んだつて……？』と半信半疑で柩車の傍へ馳集つた他の馭者馬丁、

『成程嘘ぢやねへ。もし〳〵お客樣、ちよつと下りて下さい。』と驚異の聲を上げる。

『こんな處へ馬車を休めてどうしたと言ふのだ。何？棺の中でゴト〳〵動く……冗談言つちや困る、そんな事があるべき筈がないぢやないか。』

『あるべき筈がないのがあるから奇妙です。まあ此處へ來て此音を聞いて御覽んなさい。』と言はれて、

『よもや……』とは思ひながら、施主や親戚の者達が、一應念の爲と柩車を開けて見ると、正しく棺中でゴト〳〵頻り蠢く音がする

『やつこりや大變だ。もしかすると蘇生つたのかも知れない。』と大騒ぎになつたが、眞逆往來中で、棺を引出して蓋を取つて見る譯にも行かず、

『仕方がない、家迄引返さう。』となると、馭者や馬丁が當惑顏に

『そりや困りますね、此道の惡いのにこれから又牛込迄逆戻りは大變です、それよりはもう日暮里迄僅かですから、向ふへ行つて一

應棺を調べて見て、蘇生つてゐたら改めてお家へ引返した方がいゝでせう。さうでもしないと、もし棺を開けて見て、蘇生つてゐなかつた、もう一度日暮里迄となると其中には火葬場の方が受付けてくれなくなりますよ。』と言はれると、

『大きにそれも尤だ。』と衆議一決して、

『では搖れないやうに靜かにやつてくれ。』とあつて、轆て火葬場へ着いてから、急いで柩車から棺を引出して見ると、ゴソ〳〵の音を益々頻りである。

『慥かに蘇生つたに相違ない。』と釘を拔いて蓋を取ると果然、

『ウーン〳〵。』と死んだ筈の佛樣が唸つてゐる。

『醫者だ〳〵。』と大狼狽、火葬場でも死んだ者の取扱ひは馴れてゐるが、氣息のある病人の介抱には至つて不馴れだ。

漸やく醫者が馳付けて來て、脈搏體温を檢した結果が、

『こんな例は十人に一人もないが、つまり假死の狀態であつた處へ漸くカンフル注射が奏効て來たのです。』との事で、應急の手當を加へて、危く芳魂一抹の煙と化すべき運命を、死の手から取戻して衆口期せずして『萬歲つ』と驚喜の聲を上げたが、さて困つた事には場所が場所丈に擔架が急場の間に合はぬ。

『仕方がないから、もう一度あの馬車を借りやうではないか。』

『けれど生きてゐる者を柩車に乘せて行くのも緣起が惡いね。』

『此場合だ、縁起などを構つてゐられるものか、いゝさ一遍死んだ者と諦めた病人だ、却つて長壽するかも知れないよ。』と再び柩車に乘せて、牛込迄逆戻りは、芽出度い一幕であつた。

事の序にもう一つ今度は芽出度い席上で、飛んだ目出度からぬ失策をやつた喜劇を紹介する。何しろ今度の惡性感冒は、全國到る處に蔓延して、或る地方では、一村二百何十人悉く枕を並べた處へ運惡く近年稀な大雪で、他村へ醫者を迎へに行く事も出來ず、あはれや生殘る者僅かに六人と言ふ記すも涙の悲慘な實例があつた位、親戚友達の二三人が、冥途へ轉籍する悲しみに出遭ふのは珍らしからぬ有樣、今日は誰の通夜、明日は誰の通夜と、毎日毎晩の不幸續

きに、不眠不休の身體は綿のやうに疲れて了つて、一時間でもいゝから、緩乎寢て見たいと、慾も得も要らなくつた處へ、又しても親戚から黒枠の悲報、

『又かい。』ともう涙も何も出なくなつた眼を擦り〳〵悔みに出蒐け義理は辛らい通夜にも列し、葬儀にも會し、へト〳〵になつて戻つて來て、

『あゝ堪らない、今夜こそは三日振の高鼾、明日の晝頃迄寢てやらう。』とあつて、床を延べさせようとすると、

『貴郎、今夜はさう早くから寢られませんよ。』

『えつ、又誰かゞ死んだのかい。』

『おほゝ、眞逆さう〳〵死にもしませんが、貴郎お忘れですか、今夜は靜雄さんの結婚式、貴郎は親戚總代ぢやありません、いくら毎日々々のお通夜やらお弔ひでお疲だからとて、行かない譯には參りますまい。』と言はれて、危ふく茫乎として忘れて了ふ處を思ひ出させた。

『おゝさう〳〵、餘んまり眠い〳〵で夢中になつてゐたから、すんでの事に忘れて了ふ處だつた。だがこう眠むくつちや、迚も遣切れない、出來るならもう一日延期してくれゝばいゝのに……。』と言つた處で始らず、前々から通知のあつた從弟の結婚式が、日比谷の太神宮で午後三時擧行、それが濟むとすぐ大松閣で披露會、退引

ならぬ親戚總代。

『こんな不幸續きには、從弟の奴も氣を利かして流行感冒の下火になる迄延すのが至當だ。あゝ〳〵義理と褌は欠かされない情けなさ。えゝ儘よ、もう一日の辛抱だ、それに線香臭い泣言と違つて、陽氣な場席だから、少しは眠氣覺ましになるだらう。』と諦めて、支度を改め從弟の家へ出蒐け、一同打揃つて定刻に日比谷へと自動車を馳らせた。

さて形の如き儀式も濟んで大松閣で其披露會、新郎新婦の挨拶がおはると、後は飲めや歌への無禮講、唯さへ眠むい處、酒の氣が廻つたから堪らない。誰が何を喋舌つてゐるのやら、誰が何を唄つて

ゐるのやら、痳醉劑をかけられて、經を讀んでゐるやうな鹽梅。うつら〳〵柱に凭れて船を漕いでゐたが、果ては其場に倒れて前後不覺。

『もし〳〵もうお開きでございますよ。』と搖起されて、漸やく目を覺ましたものゝ、睡魔に魅いられた知覺神經、夢は未だ今朝迄の葬式疲れに馳廻つて　思はず知らず口を辷つた挨拶が、

『はて、其出棺は何時と定りましたな。』

▣八犬傳の一人

曾つて埼玉の女子師範で、時事に關する智識の奈何を試みようと、

大勢の生徒に向つて、

『犬養木堂とは何か。』と言ふ問題を出して見た。これを滿足に答へ得たのはたつた一人。

『動物を愛護する事なり。』と答へるのもあれば、

『犬小舍の漢名なり。』と附會たのもある。

『八犬傳中の姓名なり。』との珍答もあれば、中には、

『字の形から判斷すると、國家重要の位置に、詰らない人がゐるのを譬へた語のやうに思ひます。』と憲政の神樣三文の價値もない迄に箔を剝して了ふ振るつたのもあつた。

御本人の木堂、此話を聞いて、

『おや〳〵、乃公はよく〳〵女に縁がないと見える哩。』

▣泥醉漢が記錄

先年九州で大演習のあつた折、時の内相兼鐵道院總裁和製ルーズベルト男爵、旅館もあるのに、物好奇にも態々鳥栖驛迄出蒐けて、

『今夜は列車中に泊めて貰ふ。身荷も鐵道に職を奉ずる者、須らく列車を以て我家とすべきである。』

其處で吾輩が一つ其の範を示しに來た。』と例の調子で御託宣よろしくあつて、驛長を先導に、永田警保局長に迄御招伴を申付、停車中の列車に一泊したのは、當時の新聞種となつたが、翌朝になつて早々に起出て、聊か閉口の體で、

『列車中に寢てゐても、車が動かんからどうも寢た氣がしない。あゝ大分寒かつた。』と言ひながらも、負惜みの強い言葉。

『近頃の記事は、飛行機將校や、運動競技に計り限られてゐるが、停車中の列車に寢たのは、蓋し吾輩によつて作られた記錄だらう！』と御自慢の體、處がこれを耳にした驛夫達、小聲で囁き合つて曰く、

『へん、そんな記錄は珍らしくもない、泥醉漢がこれ迄いくらも作つてゐらあ。』